

ソシオンの一般理論(IV)
愛と欲望のキューブ・モデルとソシオネットの力学系

木 村 洋 二

Toward a General Theory of Socion(IV)
The Socion Cube as a Dynamical System Model of Love,
Desire and Laughter

Yohji G. KIMURA

Abstract

A revised version of Socion Cube model of social emotions is presented. There is no change for the categories and positions of 8 emotions in the cube, which are; 1-SPD (Pride), 2-SNE (Modesty), 3-OND (Despise), 4-OPE (Compassion) for the superior, and 5-OPD (Praise), 6-ONE (Envy), 7-SND (Humility), 8-SPE (Want) for the inferior. The main modification is made to the point of Zero. In the former model, the egalitarian utopia was put to the extremity of left side of the Cube, but in the revised model it is posited to the midst of the cube which is precisely the Zero point of the phase space of the network. Consequently the Socion Cube is reinterpreted as a graphic model of the phase space of the socion network determined by the differences of social evaluation, and the velocity/rate of the change of this differences. The dynamical system model is developed to explain the ideological movement of a society, either of the Left wing or of the Right wing. The realization of the Zero, the nothingness of the reified differences, will emancipate man from the cage of mundane Cube (Pandora's box) with the affluence of surplus semio-energy. The power of humor and laughter opens the door to the hidden Utopia of Zero point. The patterns and functions of the dyadic operation are discussed in terms of the immunity ("semio-types") of socions.

Keywords: socion cube emotion love laughter ideology freedom equality semio-type terrorism humor

抄 録

感情のキューブモデルを、差異とその変化率で定義される相空間上の軌道として再構成する。主な改定点は、1) 左側面の平等化する感情の位置が上下で入れ替わったこと、2) 差異の解消するユートピアが、上部の頂点でも左の極端でもなくキューブの中心、つまり相空間の原点に定位することが判明したこと、の2点である。日常のコミュニケーションを説明するために、荷重差による8種類の笑いをキューブ上で表現した。キューブ右側で発生した荷重差を、外部から左側面を経由して無の原点へと回帰させる4本のユーモアの軌道が論じられる。ユーモアと祭りとは、左右のイデオロギーを超えて人間を差異の呪縛から解放する重要な機能をもつ。ダイアッド・ループの荷重記憶がダイオン(2者関係の荷重変換子)に蓄積されると仮定すると、人間関係における個人の行動特性のかなりの部分が、荷重入力に対する予期出力の選択的な投射から説明できる。あわせて、難しい性格や関係のいくつかは、特異的なダイオンの被誘導動作から説明される。

キーワード：感情 愛 欲望 笑い ユーモア イデオロギー 迫害 自由 平等 コミュニタス テロリズム セミオタイプ

はじめに

ソシオンのネットワークを駆動する欲動の力学を検出しようと、最初に「感情のキューブ・モデル」を構想したのは1993年であった(木村1993)。以後、思考実験を重ねるなかで、何度かモデルの改定と修正を行った(木村2000、2001)。本稿は、「キューブ・モデル」の最新バージョンを提示し、笑いとユーモアの問題を検討する。あわせて、ダイオンの特異的なカップリングを一種の免疫動作として概念化するとともに、キューブをソシオネットの位相図と見ることで、より精密な力学系モデルへの展開を目指す¹⁾。

1. キューブモデルの再構成

1-1. ソシオンと欲望

1-1-1. とりこみ

ヒトは自他の像をとりこみ、これに重みづけを行う(図1ソシオンのダイアッド、木村2000)。この「重み」を「荷重」(semio-weight)とよぶ。荷重は、関係の重要性に応じて付与されるポテンシャル量で、正-負(P/N)の分極性をもつ。荷重は、生きられた関係の(無意識をふくむ)「記憶」であるが、同時に「予期」の投射でもある。この荷重の量によって、好-悪、信-不信にかかわる体験強度(リアリティ)が規定される、と仮定する。ちなみに、この荷重は、笑いによって「無化」される(木村1983)。

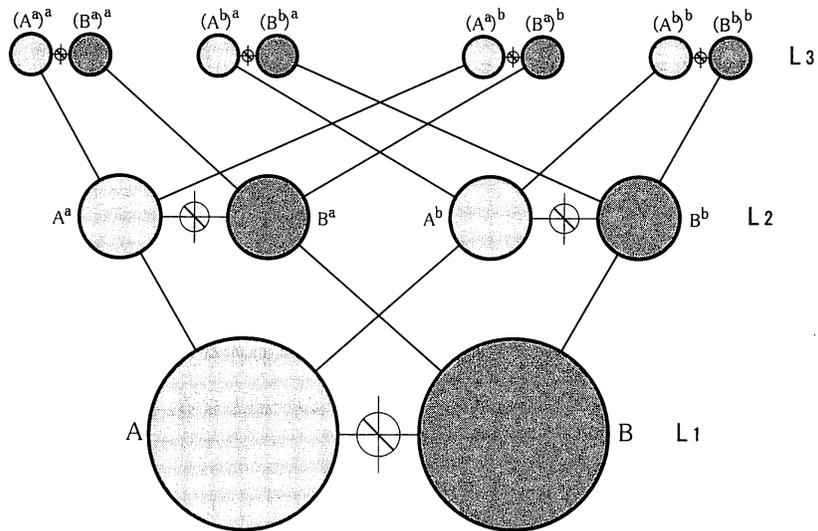
1-1-2. 魅惑

ヒトは他者に魅惑される(正・Pの荷重を備給する)と、そのすがた・ふるまいを模倣する。逆に、反感を感じる(負・Nの荷重を備給する)と、反対模倣(negative identification)をする傾向がある。主体によって備給された他者の表象と正負の荷重のセットを私Iとよぶ(木村1995)。

1-1-3. 同一化

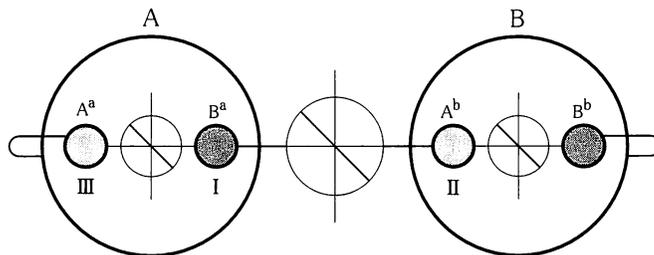
ヒトは他者がかざした私の鏡像に同一化する＝「騙し取られる」(J. ラカン)。この鏡像へ

1) 本稿をお読みいただくだけで、理論の全体像を簡潔に把握できるよう、改訂部分だけでなく再説の部分もふくまれている。既刊の論文(木村2000)と重複する記述がふえるが、伝達の便宜上お許しいただきたい。



L1 はオブジェクト・レベル (身体と行為) L2 はサブジェクト・レベル (表象と感情)
L3 はメタ・レベル (言語と思考)

1 a くり込み



B^a はAの見たBでAの私 I A^b はBの見たAでAの私 II A^a はAの見たAでAの私 III
Aの自己システムは 3つの荷重表象の超個体的なコミュニケーションループを構成する

1 b 多重交差

図1 ソシオンのダイアッド

備給された荷重を私IIとよぶ。私IIは他者のもとにある私の「分身」あるいは「人質」である。魅惑から我に帰ったとき、「欲望」が発生する。

1-1-4. 差異

私のみた他者の像(私I)と、他者のみた私の鏡像(私II)の(無意識的な)比較によ

って自他の荷重差が検出される。この差異 (II-I) がマイナス (負) である場合、私はこの「欠如」を悔しさや苦しみににおいて経験し、逆にプラス (正) であるときはその「余剰」を快感として喜びのうちに経験する。

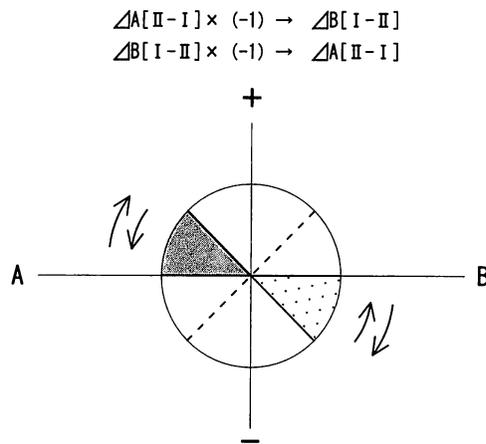
1-1-5. 愛と欲

自己の欠如を減らし余剰を増やそうとする動作意思を「欲」とよぶことにする。他者の余剰を減らしたり、欠如を増やしたりする動作も「欲」の一種である。

これに対し他者の欠如を減らし余剰を増やそうとする動作意思を「愛」とよぶ。自己の余剰を減らしたり欠如を増やしたりするのも「愛」の一種となる。

1-1-6. 反対称変換

差異に同一化する限り、他者の余剰 (あるいは欠如) は私の欠如 (あるいは余剰) と逆対応する。つまり、A の荷重差を正負反転すると B の荷重差となり、B の荷重差を正負反転すると A の荷重差となる。この自他のシーソー変換は、荷重差をモニターすることで、自己の荷重差から他者の荷重差を自動的=無意識的に構成すること (あるいはその逆) を可能にする²⁾。



自と他が荷重の点対称変換で対応する

図2 荷重のシーソー

2) モデルが照準しているのは、ライバルが出世して、「遅れをとった!」と思いつむような感情の動作領域である。ちなみに、駅のホームで「電車が動き出した!」と思って体に加速度まで感じたのに、動き出したのは反対側の列車だった、という場合も、このシーソー変換が (身体図式レベルで) 働いていると考えられる。

1-2. 感情のキューブ

1-2-1. ダイオンのシーソー

荷重差の検出から他者構成を可能にするこの変換ユニットをダイオン (dyon) とよぶ。その回路ロジックは単純にシーソー (図2) であらわすことができる。この変換が適用されるのは、背くらべとか、かけっこ、おやつの寡多、人気、所有、地位や名誉など、オブジェクトレベルに関連する自他の表象について検出されたなんらかの差異である。じっさいのダイオンの動作はサブレベルで主観的感情を巻き込んだかたちで発生するが、当の意識主体は、それをオブジェクトレベルのリアリティとして経験することが多い。

1-2-2. 8つの感情

優位者 A と劣位者 B がカップリングしたばあい、それぞれ自他に対する愛の動作 2 種と欲の動作 2 種で、全部で 8 種類の荷重オペレーションが可能となる。

A の動作

- 1 SPD (Self-Positive-Differentiation) : 優位の自己の荷重を上げる (ほこる/誇高)
- 2 SNE (Self-Negative-Equalization) : 優位の自己の荷重を下げる (つつしむ/謙譲)
- 3 OND (Other-Negative-Differentiation) : 劣位の他者の荷重を下げる (さげすむ/侮蔑)
- 4 OPE (Other-Positive-Equalization) : 劣位の他者の荷重を上げる (あわれむ/憐憫)

B の動作

- 5 OPD (Other-Positive-Differentiation) : 優位の他者の荷重を上げる (たたえる/称賛)
- 6 ONE (Other-Negative-Equalization) : 優位の他者の荷重を下げる (うらやむ/嫉妬)
- 7 SND (Self-Negative-Differentiation) : 劣位の自己の荷重を下げる (いやしむ/卑下)
- 8 SPE (Self-Positive-Equalization) : 劣位の自己の荷重を上げる (ほしがる/欲望)

以上、簡単なシーソー型の荷重変換動作から、自他の比較にかかわる 8 つの基本感情が論理的に導出できることがあきらかになった³⁾。

3) A を先輩、B を後輩、あるいは兄と弟、親と子、先生と生徒などと置き換えて、具体的な状況を設定して思考実験していただくとわかりやすい。

1-2-3. キューブの構成

優位者 A の可能なオペレーションを前面に、劣位者 B の可能なオペレーションを後面にそれぞれ対応するようにわかりやすく配置したのが「感情のキューブ」(図 3 a)である。なお、優劣を検出する比較の次元は「人気-不人気」から「信-不信」、「愛-憎」をベースに、勉強や仕事の出来不出来、地位や学歴、収入や家柄、色の白さや鼻の高さまでいろいろあり、状況や文脈しだいで優劣は逆転しうる。

ヒトが自他の差異に同一化するかぎり、論理的に発生可能な荷重変換パターンは、以上の 8 つの種類に限られる。この 8 つは、切りとり方や束ね方、価値づけはちがっても、民族・文化・文明の別をこえて、人類にひろく共通している⁴⁾、と推測できる。

なお、図 3 b にも記入したように、キューブ(改訂版)は、荷重差を y 軸に、荷重差の絶対値の変化率を x 軸にとった一種の位相図(力学系)と考えることができる。キューブの頂点は、この位相図の各象限の荷重動作とそれに対応する感情をシンボリックに表現したものとみることができる(37 頁の図 9 を参照)。

1-2-4. シャドーとシーソー

意識が、自己あるいは他者の表象を指向(注意)しているとき、他方は指向の影に入りやすい。意識されにくい指向の影になった動作をシャドーとよぶ⁵⁾。シーソー変換における左右の荷重動作は、どちらかが指向の対象になると、他方はそのシャドーとなりうる。どちらがシャドー化するかは、文化的禁止やイデオロギーの誘導⁶⁾と関わることが多い。

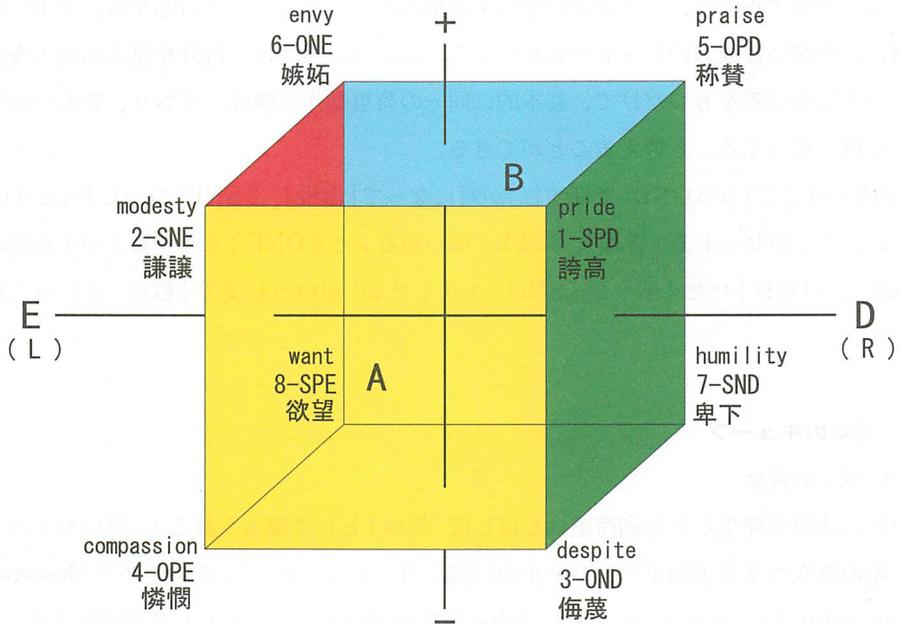
4) かつて、「首狩り」で知られたフィリピンのイフガオ族には、自他の比較によって到来する「欠如(と欲望 8 SPE)」そのものを意味するように思われる基本的な感情があり、これが「リゲット liget」という名前を与えられ、分節され、「首狩り」という 6 ONE 行為を生み出すほどに、激しく生きられていることが指摘されている(熊野健 1982)。これを「残酷」と思う人は、日本の侍も、敵の武将の首をぶら下げて勝鬨をあげたことを想起すべきである。

ちなみに、ルース・ベネディクトは日本人の「恥」と「羞恥」を 7 SND 系の負の感情として、ひと括りでとらえた(それを指摘したのは作田啓一 1967 である)。そもそも自己主張を重視するアメリカ文化には「当惑」embar-rasement はあっても、よい意味での「はにかみ」という概念はないし、したがって「恥ずかしがり屋」をほほえましく見まもるといった気風もないようである(P. ジンバルド 1977 によれば shyness は治療しなければならない病気である)。

ある文化の内部でその名づけられた感情を生きる成員は、それを自明のものとして生きるもので、人類の感情が基本的な共通性をもつことにも気づきにくいし、異文化との差異を相対的なヴァリエーションとしても捉えにくい。じっさい、文化人類学のおおくは、その西欧中心主義によって(最近ではその逆の傾向もみられるが)、かれらが「発見」した奇矯な「差異」を、「野蛮」や「劣等」、「未開」のせいに帰しがちであった。本稿のキューブモデルは、感情という一見捉えどころのないものが、単純に自他の比較とシーソー変換という人類共通の動作に由来すること、感情の多様性は、そのダイオン動作の禁止と誘導(と合成)の変異によるものであることを理解する簡便な道具となることを目指している。

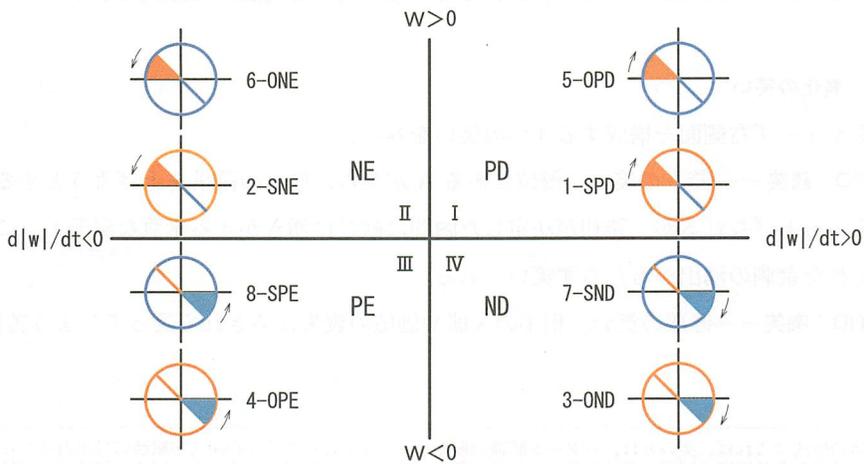
5) たとえば、1 SPD の誇りは 3 OND 侮蔑のシャドーとなりやすく、その逆もおこりやすい。4 OPE 憐れみは、しばしばそのシャドーとして 2 SNE 慎しみをともない、その逆も真である。8 SPE 欲望と 6 ONE 嫉妬が、たがいにシャドーとなりやすいことは良く知られているとおりである。5 OPD 他者を尊敬することと 7 SND 自分を卑下することも同様で、偉い人の前にでるとやたら恐縮したり萎縮したりするのは、尊敬のシャドー効果である。反対に、恐怖政治が動員する崇拜の感情 5 OPD は迫害に対する怯え 7 SND のシャドーにすぎない。

6) キリスト教の「愛」の思想の影にかくれた「ルサンチマン(怨念)」に注目した F. ニーチェ(1887)や、M. シェーラーの議論(1919)などがよく知られている。最近の感情の社会学的研究については、高橋由典(1996)や岡原正幸・山田昌弘(1997)、井上芳保(1988)などを参照されたい。



A:the superior B:the inferior E:equalization (Left) D:differentiation (Right)
 S:the self O:the other P:positive N:negative +:surplus -:want

図 3 a 感情のキューブ



y軸はAとBの荷重差(w)で、上は余剰(w>0)、下は欠如(w<0)
 x軸は差異の変化率(d|w|/dt)で、右は差異化(d|w|/dt>0)、左は平等化(d|w|/dt<0)
 象限Iは w>0, d|w|/dt>0 (Positive Differentiation 称えられて誇る)
 IIは w>0, d|w|/dt<0 (Negative Equalization 嫉まれて慎む)
 IIIは w<0, d|w|/dt>0 (Positive Equalization 憐れまれて欲しがる)
 IVは w<0, d|w|/dt<0 (Negative Differentiation 蔑まれて卑しむ)

図 3 b 4つの位相

キューブモデルでは、上下の頂点をむすぶ垂線がこのシーソーに対応する。上下一対の感情は、たがいに他方のシャドーとなりうる。この対の感情は、自分を見るか他人を見るかという指向の差をもつだけで、基本的に同一の荷重動作を構成しており、ひとつの社会的「性格」をつくる、と考えることができる。

1 SPD「ほこる」と3 OND「さげすむ」が対になって「傲慢」、2 SNE「つつしむ」と4 OPE「あわれむ」がセットで「謙譲」、8 SPE「ほしがる」と6 ONE「うらやむ」が手を組んで「強欲」、5 OPD「たたえる」と7 SND「へりくだる」がいっしょで「敬虔」といった具合である。

1-3. 笑いのキューブ

1-3-1. 笑いの発生

自他の比較で発生した余剰荷重はしばしば「笑い」として表出される⁷⁾。笑いをもたらす荷重差の急変つまり予期ポテンシャルの「落差」(H. スペンサーの「ズレ下がり」descending incongruity) は、キューブ上では、頂点の位置の突然の「ズレ」として記述できる。

キューブ右側面では4つの頂点が上下に開くかたちで予期との落差が拡大し、左側では荷重差の4つの頂点が原点に向かって収縮するかたちで突然の落差が発生する。差異化の笑いが4つ、平等化の笑いが4つ、あわせて8種の笑いを理論的に識別できる。

1-3-2. 異化の笑い

まずキューブ右側面を構成する4つの笑いをみる。

1 SPD：誇笑——誇りの笑い。優位にあるAがさらに自己の荷重を上げようとする傲慢な高笑いもあげられるが、勝利が決定した瞬間に歓びに湧きかえる素直な笑顔も、この自己に訪れた余剰の湧出がもたらす笑いである。

3 OND：嘲笑——軽蔑の笑い。相手の失態や価値の喪失にあきれて笑ってしまう苦笑や、

7) 筆者の仮説によれば、笑いとは、パターン認識の振動をキッカケにして「作動図式が賦活信号出力系から脱離する一時的な負荷脱離の回路現象であり、これは余剰出力の放出を通じて愉快感を生み出すと同時に、作動中の図式に急激なデ-カセクシスを引き起こして、その図式について体験されていた現象学的リアリティを生理学的にキャンセルする」(「笑いのメカニズム」木村1983)。以上から、突然の余剰は、笑いの回路を通じて、つまり「笑い」として、放出されうる、と仮定できる。緩慢な余剰は「微笑」として表出されやすいだろう。なお、突然発生した余剰が結果的に笑いとして表出されるものと、なかば意思的にシーソーを動作させて事前に余剰を搾り出す意図性の笑いがある。

ちなみに、笑いについてはじめての「科学的仮説」を自覚的に展開したのは、ハーバート・スペンサー(1860)であろう。「笑いdescending incongruity」の反対を「驚きascending incongruity」とする彼の議論には、神経インパルスを「心的エネルギー psychic energy」として物象化しているとはいえ、今日の認知科学・回路工学にもつながる興味深い議論がふくまれている。

はなから軽蔑して嘲ってわらう差別的な嘲笑がある。後者はわざとあら捜しをして他者を貶めたその落差が余剰化して笑いを生む、と考えられる⁸⁾。

7 SND：卑笑——卑下の笑い。自分を下げた分だけ余剰になる。敬虔でつましい笑いもあれば、自分を卑下する力ない笑いや自虐的な笑いもありそうである。前者は「虔笑」と呼ぶべきかもしれない。なにか失敗して照れるように笑うときは、その失敗自体のリアリティを「無化」してしまいたい、という意志が混入しているのだろう。

5 OPD：賛笑——称賛の笑い。他者を称える笑いで、試合の表彰台やパーティの席などでしばしばお目にかかる。他者のパフォーマンスに脱帽したとき、その余剰分が笑顔となって他者に贈られる、と考えられる。

1-3-3. 同化の笑い

つぎに左側面の笑いを検討する。

2 SNE：謙笑——謙遜の笑い。勝利したときでもはずかしそうに微笑みをうかべる人もいる。他者から拍手や賛辞を受けて、頬を赤らめるのはこの謙遜の微笑である。自己に贈られた過分とおもえる余剰分を「無化」する笑いである。

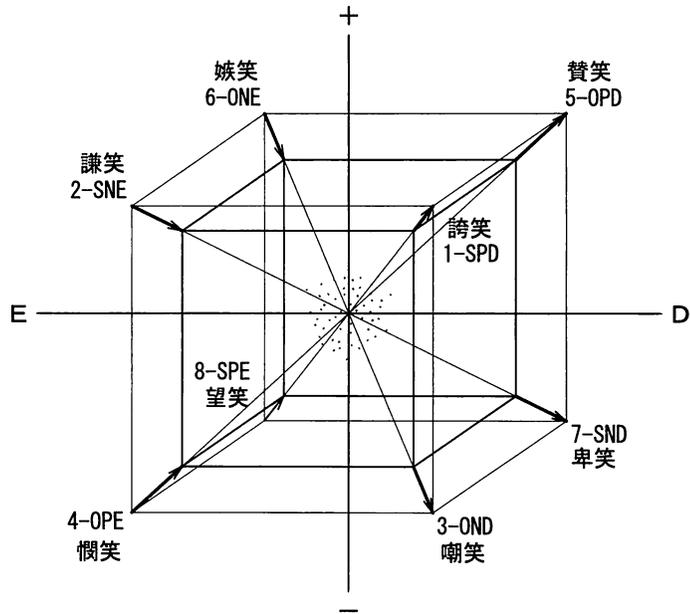
4 OPE：憫笑——憐憫の笑い。他者にたいするいたわりの微笑で、共感の表情のなかで、口元や目にあらわれる「ほほえみ」である。長老や仏像がうかべる慈悲の微笑は、いずれその苦しみと欠如から他者が解放されることを予期あるいは希望するところの動作の表出である、といえよう。

8 SPE：望笑——欲望の笑い。まもなく自己の欠如が満たされる、という予期のもたらすうれしさの笑いである。ああ助かった、という安堵の笑いや、ああおいしかった、という満足の微笑みなどもこれに相当しよう。相手に同情や援助を催促したりする媚び笑いもふくまれる。

6 ONE：嫉笑——嫉妬の笑い。他者の優位性を低下・剝奪する笑いで、皮肉な冷笑が典型である。権威の失墜や有名人の失態がもたらす笑いには、荷重秩序の崩壊にともなうスキ

8) 1 SPDの優越の笑いを重視したのは、万人は万人にとってオオカミである、と説いたホプスである。ベルグソンは、3 ONDの笑いについて、本来躍動的な生命が、機械的なこわばりをみせたとき、社会がこれを「懲らしめる」ために笑いの標的にする、と論じている。

2 SNEの謙遜の笑いの文化的意味について注目した論者に、アルフレッド・スターンと、それを紹介した梅原猛がいる。日本でもっともはやく笑いの科学的(哲学的)研究に取り組んだ梅原は、4 OPEの慈悲の微笑みについて日本文化との関係もふくめて論じている。たまたま本稿では「嫉笑」と字をあてた6 ONEの笑いを、権威や支配者をわらう民衆の笑いに関連させて肯定的にとらえた笑い研究にはバフチーンをはじめすぐれた伝統の蓄積がある(バフチーン1965、山口昌男1975、森下伸一1996)。本稿のメリットは、いろいろな笑いを簡単な一覧表にできる、ということにつきる。ちなみに、改定版キューブの初出は2000年国際ユーモア学会、この「笑いのキューブ」の初出は、2001年度の日本笑い学会である。



E(左)側では差異が縮少し D(右)側では差異が拡大する

図4a 笑いのキューブ

	E 平等化 (左翼の笑い)	D 差異化 (右翼の笑い)
P 上昇	4-OPE 憫笑 (いたわり励ます微笑) $\circ \rightarrow$ posion 8-SPE 望笑 (欲望充足の微笑)	1-SPD 誇笑 (誇らしい優越の微笑) $\leftarrow \circ$ posion 5-OPD 贊笑 (ほめ称える微笑)
N 下降	2-SNE 謙笑 (譲り慎む微笑) $\bullet \leftarrow$ necron 6-ONE 嫉笑 (羨み妬む微笑)	3-OND 嘲笑 (蔑み侮る微笑) $\bullet \rightarrow$ necron 7-SND 卑笑 (通り卑下する微笑)

図4b 微笑の種類

ヤングルの笑いと、この嫉妬によるルサンチマンの笑いが混在している。

キューブ右側面を構成する誇笑、嘲笑、卑笑、賛笑の4つは差別主義者・右翼の笑い、左側面を構成する謙称、憫笑、望笑、嫉笑の4つは平等主義者・左翼の笑いということができそうである⁹⁾(図4b)。なお、8個の命名はとりあえずの概念化に漢字をあててみただけで、暫定的なものにすぎない。

1-3-4. ユーモアの軌道

以上みた8つの笑いは、差異にとらわれた「キューブ」内部の笑いであり、自他の優劣比較に拘束された世俗的な笑いにすぎない。これに対し、差異自体を笑う脱世俗的な笑いとしてループを原点へと転軸する「ユーモア」と、差異のシステム総体を初期化する「大笑い」のふたつがある。

キューブモデルによるユーモアは、右象限で発生した差異をある同一性の隘路を辿って一瞬のうちに左象限へと送り込み、「原点」の無の力によって差異を溶解する精神の運動として記述できる(図5)。

軌道は、H1: SPD → SNE、H2: OND → OPE、H3: OPD → ONE、H4: SND → SPEの4本である。

H1: SPD → SNE

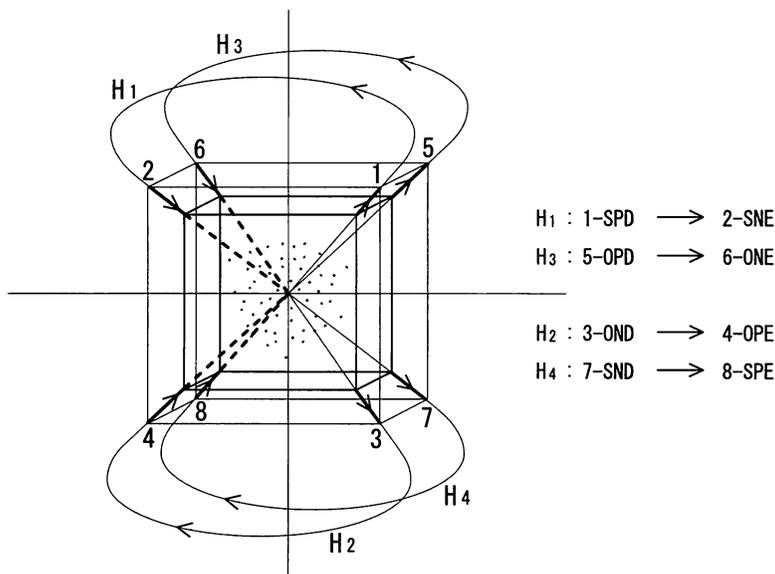
H1(誇る→慎む)は、尊敬を寄せられた人が自分を普通のレベルに引きおろす謙遜のユーモアである。たとえばニクソンのスキヤングルによる退陣後、たまたま副大統領から大統領職についたフォード氏が、就任演説で「私はフォードです、リンカーンではありません」¹⁰⁾と切り出した。これは一級のユーモアとして、多くのアメリカ国民をよろこばせたと

9) もちろん、右翼の人は右側の笑いだけを笑い、左翼は左側の笑いだけを笑う、わけではない。キューブを構成する左右の稜線上の差は、差異を拡大するか(右側面-差別化)、縮小しようとするか(左側面-平等化)の運動方向のちがいである。(右向きと左向きのイデオロギーの「風」については、39ページ以降を参照。)

どちらか片方の動作が現実的に不可能だったり倫理的に抑圧されたりすると、シャドーと同じように、本人の意思というより意識に反して顔面に無意識の「笑い」が漏れ出る、ということが起こりうる。たとえば、自分の「謙虚さ」(2 SNE)を「得意」そうに(1 SPD)話す人、「卑下」しながら(7 SND)「いやしい」欲望(8 SPE)の笑みを浮かべる人、「尊敬」を語りながら(5 OPD)口元に「皮肉」な笑い(6 ONE)がもれる人、そしてなによりやさしげな「同情」のこぼれかけながら(4 OPE)、目が「冷たい」光り(3 OND)を宿している人など、身のまわりに(もちろん自分自身をふくめて)たくさんいるだろう。

言説の真偽を判断するには、本人も自覚できないシャドーの存在を意味するこれらの微笑の漏れ出しが、しばしば決定的に重要なシグナルとなる。人間のコミュニケーションにおいては、会って目を見て話す/聞くことが(テレビのクロスアップもふくめて)重要となる所以である。

10) フォード氏はその風体もふくめて「凡庸さ」で知られ、就任後もジョークのネタにされつづけたが、最後に自分をさんざん笑いものにした記者やコラムニスト、コメディアンをパーティに招き、ホワイトハウスの広報活動に貢献してくれたことに「感謝」の意を表したという(村松増美1996)。これは、H4: SND → SPEのユーモアといえるかもしれない。



点雲は笑いによって余剰化した自由荷重

図5 ユーモアの軌道

いう。もうひとつ、死生学とユーモアの研究で知られる上智大学のデーケン先生に学会でお会いしたときの実話である。尊敬するデーケン先生に「お会いできてうれしいです」と恭しく名詞をさし出した小生に、先生は「いやどうも、何にもデーケンです」とニコニコしながら名詞を下さったのであった。

H₂ : OND → OPE

H₂ (蔑む→憐れむ) は、蔑むべき他者の「失敗」を笑いによって左象限へつれもどし、「励まし」へと変えるユーモアである。お座敷で芸妓さんがオナラをしたとき、「お、ごめん、やってしまうた！」と咄嗟にお尻を浮かせたりすることのできる客は、ユーモアのある粋な客である。相手に「つつこみ」をいれて落ち込みかけたところを救いあげる漫才の技法などもこのH₂の一例としてあげることができるだろう。

H₃ : OPD → ONE

称えるべき偉人などを普通人のレベルへひきもどすユーモアで、その笑いは權威の呪縛から思考と感情を解放する¹¹⁾。天国の会話としてよく引かれるジョークがある。モーゼが頭

11) これは実話であるが、昭和天皇が湯布院に行幸されたとき、「あの山は湯布岳と申します」と説明する町長に、「では、あの山は？」とお尋ねになった。その山の名倉木山を思い出せなかった町長は、「ただの山にてございます」と答えた。「あ、そう」と陛下はうなずかれた。その数年後、皇太子が同じ町を訪れた。皇太子(現天皇)の最初の質問は、「『ただの山』とはどこにありますか？」であった、という(福田1994)。

を指して言った、「一番大切なのはここだ」と。するとキリストが胸を指して言った、「いやここです」と。次にマルクスがやってきて、「いやこっちだ」と胃袋を指していった。そこにフロイトが割って入り、「いやもっと下の方だ」と言った。最後にアインシュタインがやってきて、「ちがうね、すべては相対的だ」と言った。有名人や政治家を風刺するジョークの多くも、この H3 のパターンである。

H4 : SND → SPE

自分の苦境や失敗を笑い飛ばすユーモアである。第2次大戦中の実話として伝えられるものにつぎのようなものがある。ナチスのVロケットによる連日のロンドン空襲でデパートの屋根に大きな穴があいた。翌朝そのデパートの入口に、「本日より入口を拡張しました」という看板が立てられた、という。もうひとつ、『ユートピア』を書いたトマス・モアは、無実の罪で斬首される前に、俺の首は太くて短いからしっかり狙え、と震えている刑吏を励ましたという話が伝わっている。

1-3-5. ゼロの笑い

ユーモアにおいては、同一性と差異の振動する一瞬の間隙をついて、自と他が入れ替わり、余剰が欠如に、あるいは欠如が余剰に反転する。自明性を越えたズレの発生が、瞬時の洞察と笑いの力によって差異のループを転換する。「無」へと跳躍する潔さと、「なるほど！」と着地するその機転の見事さが、差異への固着を防止し、シーソーの動作にさきがける精神の自由度をもたらす¹²⁾。

キューブ原点の大笑いでは、前備給エネルギーが余剰化し、豊かな無となって放出される。無の原点への跳躍こそ、キューブという浮世の檻からぬけるおそらく決定的な手段である。

カオスと崩壊、暗闇と死に先駆けて「無」とびこむ豪胆な勇気が、原点の無＝ゼロの演算の奇跡によって、固着した存在を余剰へと転換する。余剰化した備給エネルギーが、愉快な大笑いのなかで、喪失の恐怖から精神を解放し、在ることそれ自体に驚く始原の力を覚醒させる。人類の最後の進化は、「みちた意味」ではなく、この原点における「豊かな

12) ハリウッド俳優のロナルド・レーガンが大統領選に出馬したとき、「たかが役者が」というインテリたちの嫌味にたいして、「役者が大統領になれるのはアメリカだけだ」と応じた、という有名な話がある。フロイトのユーモア論では、この種の精神の自由度がキーコンセプトになっている。なお、日常にみられる冗談の笑いも、この4本の軌道に沿って生みだされるものがおおい。たとえば、わざと気取って自慢してみせたりする技法(H1)や、親しい友人を貶してからかったりする技法(H2)、反対におだててもちあげておいて落とす技法(H3)、自分からドジな失敗談を話したりして笑わせる技法(H4)など、ほぼこのユーモアの軌道に対応している。

無=0]の実現にかかっている、といえるかもしれない。その原点とは、自他の差異がそこで死ぬ荷重の墓場であり、さらにあたらしい差異がそこから生まれる始原である。差異に定義されたかぎりにおける存在と世界、世間と私のあり方がそこで終わり、初期化された「存在の媒質」(荷重エネルギー/予期ポテンシャル)がそこから湧出するはじまりの場所である。

ユートピアは、差異を頂点までのぼりつめた「至高」の充ちた場所でもなく、キューブを「極左」へ走った平等主義の極限でもなく、大笑いによって差異が解体され、豊かな余剰となって自他のあいだにあふれる「無」の原点、キューブ中心の原点=ゼロ・ポイントにある¹³⁾、というのが本稿の結論のひとつである。

1-4. コミュニケーション

1-4-1. ポジオンとネクロン

AとBのコミュニケーションによって、自己あるいは他者にたいする荷重が変動したとき、両者のあいだで「微小荷重」が交換されたと考えることにしよう。仮定されるプラスの交換荷重子を「ポジオン」(posion)、マイナスの荷重子を「ネクロン」(necron)¹⁴⁾と名づける(木村2000)。ポジオンは「アレ!」という「祈り」の意志動作(あるいは感情)に対応し、好意や信頼、尊敬の念などがその具体的対応物である。ネクロンは「ナクナレ!」という「呪い」の意志動作に対応し、不信や侮蔑、憎悪の感情などを内容としてあげることができる。

一般に、あたたかい「微笑み」がポジオンを運び、つめたい「冷笑」がネクロンをはこぶ。祝福(5 OPD)されて、うれしそうに微笑む(1 SPD)とき、励されて(4 OPE)あかるい笑顔が生まれる(8 SPE)ときは、このポジオンが伝達されたときである。反対に、

13) 日本神話には、天の岩戸開きという笑いによる世界救済の物語が残されている。太陽の消えた暗闇の高天原で絶望に打ち沈む神々の前で、女神アメノウズメノミコトが突然踊りだし、ストリップをして(「ひもをホトまでさげき」)神々を笑わせ、世界に光(天照大御神)を呼び戻した、というすばらしい神話がある。とんでもないズレをキッカケにして生まれた大笑いが暗闇を笑いとばし、世界全体を原初の無へ回帰させ、その無の原点からふたたび始原の光りが回復された、と解釈できる。

【長崎の鐘】の原著者として知られる永井隆(当時長崎医大物理療法科助教授)は、原爆投下直後の火炎のなかで看護婦や学生と一緒に「一同声をたててひとしきり笑った」ことを報告している。「みんなが私の口を開くのを待って、じっと私をみつめている。……私もみんなの顔をじろじろ見回すばかり、こんな時にはあわてては駄目だ。落ちついていたら焼き殺される、あたりまえにしているわけにもゆかぬ。そう考えて私は思わず、にやりと笑った。あまりにも唐突に笑ったので、皆もついぶっと吹き出した。「わっはっはっは」一同声をたててひとしきり笑った。」(44頁)そのあと全員が炎の海にとび込んで仲間や患者の救出にあたったことは言うまでもない。

なお、この大笑いが「世界」を「初期化」して新しい生への希望というより力を生むのは、「東洋的無」の文化の特権ではない。ニーチェのツァラトゥストラの「哄笑」はあまりに有名であるし、20世紀最大の詩人のひとりP.ヴァレリーは、若かりし頃クローゼットから転がり落ちたマンガを読んで笑い転げるうちに、自殺を思いとどまったと告白している。

軽蔑(3 OND)の嘲笑や妬み(6 ONE)の冷笑を浴びて、卑屈な笑い(7 SND)や自嘲気味の笑い(2 SNE)が浮かんだときは、ネクロンが伝わった、といえる。第1次的な荷重動作の変化を直接顔面に表出するヒトの笑いは、コトバの壁をこえて人類のこころを正負を問わずカップリングするもっとも強力で普遍的なコミュニケーションメディアである¹⁵⁾。

1-4-2. 6つのループ

キューブは、比較優位のAと劣位のBのそれぞれがとりうる4つの可能な荷重動作を、仮定の交換荷重子であるポジオンあるいはネクロンの交換コミュニケーションによって連結したモデルと考えることができる。対応する感情動作を連結すると、それぞれに正負の荷重が循環するコミュニケーションのループが全部で6本構成される(図6)。

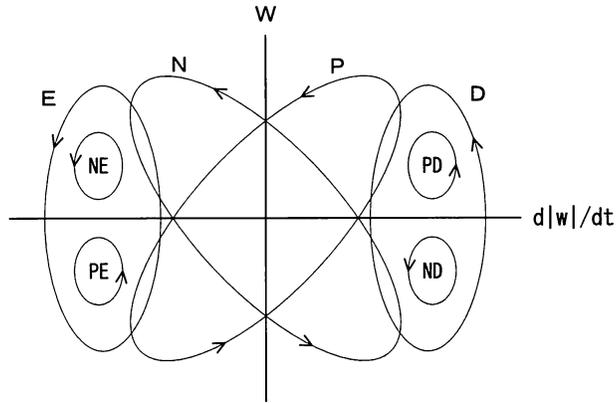
Eループ

まず、キューブ左面を構成するEループ(Equalization Loop)をみよう。AとBの荷重動作をつなぐ[2 SNE—4 OPE—8 SPE—6 ONE]のループで、回転すると荷重差が縮小して平等化する。優位者A(たとえば兄)がみずからを慎み(2 SNE)、劣位の弟Bを憐れむ(4 OPE)ことで、兄から弟へいたわりの微笑みとともに援助や「励まし」のポジオンが送られる。深い欠如をかかえて悩む(8 SPE)弟Bは、どうしてもっと同情して助けてくれないのか、と兄の薄情さを怨みながら嫉妬と「冷笑」のネクロンをおくりだす(6 ONE)。なお、このEループ(平等化・同化)とつぎのDループ(差別・差異化)は、荷重シーソーのポンプ動作によって駆動されるので、シャドーの発生をともなう。

Dループ

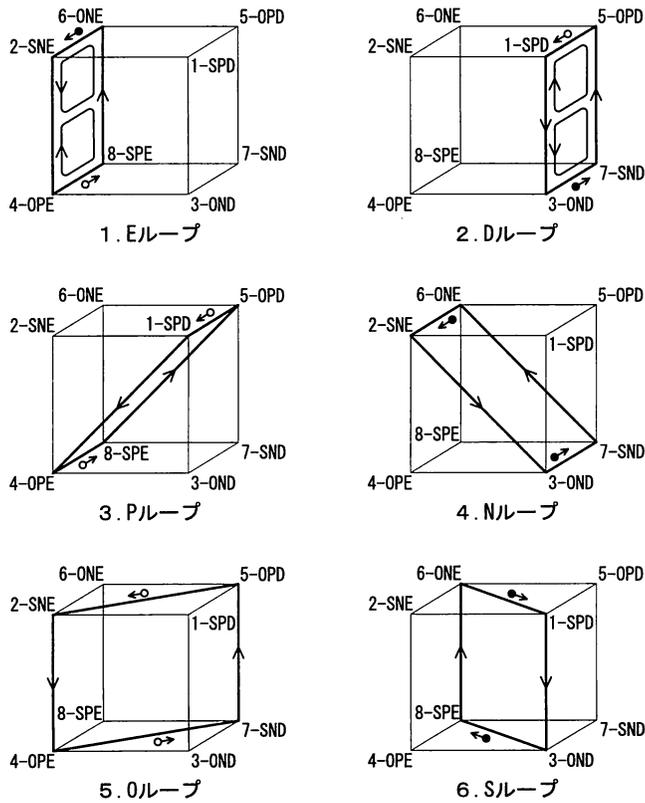
キューブ右側面のDループ(Differentiation Loop)に移ろう。[1 SPD—3 OND—7 SND

-
- 14) ポジオンとネクロン双方あわせていう場合は、セミオン semion と呼ぼう。ちなみに、まだ欠如(ネクロン)か余剰(ポジオン)かわからないデキゴトの予期もあって、これは衝撃で驚いたあんぐりした表情を生むだろう。いぜんにも述べたように、ポジオンもネクロンも交換される、と仮想すると記述が簡単になるために採用された用語法であり、じっさいに、祈りやたたりや霊力のような目に見えない力が存在する、と考えているわけではない。コミュニケーションによる相互的な感応のなかで量も強さも機能も決まってくる不確定な関係の性質のもの(というよりはたらし)にあたえられた名称である。私たち日本人が多用する「気」の概念にもっともちかい。ポジオンは陽性の気、ネクロンは陰性の気である。木村敏(1978)、木村洋二(1983)などを参照。
- 15) これらの笑いと笑顔は、当人の感情状態に反して意志によって表出されることもあれば、しばしば当人の意図を裏切って荷重動作の実態を漏洩する場合もある。その表出のタイミングと形態から他者のこころの動作と関係への意志をシャドーをふくめて読みとることは、笑顔で自分のこころを表出・操作することをふくめて、人間のコミュニケーション行動にとってもっとも重要なスキルであり、しばしば品質証明でもある。ヒトにおける笑顔表現の普遍性については、ダーウィン(1859)、アイブル-アイベスフェルト(1978)、池田進(1995)などを参照。



y軸は 荷重差w、x軸は差の絶対値の変化率 (d|w|/dt)

図6a 位相とループ



○はポジオン ●はネクロン →は流れの方向

図6b キューブのループ

図6 6つのループ

―5 OPD)の頂点をむすぶループで、回転すると優劣の荷重差が拡大する。まず、尊大な(1 SPD) 優位者 A (先輩) が劣位の B (後輩) を蔑んで「嘲笑」(3 OND) したとしよう。ネクロンを送られた劣位の B は、みずからを卑下して(7 SND) 劣等感をふかめる。そのとき自己卑下のシャドーとして優位者 A を崇める動作(5 OPD) が発生する。卑下をとまなうそのポジオン感情は、一種の「お追従」の笑いとなって A に伝わり、A の自尊感情(1 SPD) をそれなりにくすぐるだろう。その肥大する自尊心のシャドーとして、B にたいするいっそうのネクロン(侮り) が生みだされることになる。

P ループ

右上から左下にかけての対角線をむすぶ[4 OPE―8 SPE―5 OPD―1 SPD] の P ループ(Posion Loop)では、陽性の荷重であるポジオンが交換される。ループが回るほどにプラスの荷重が移転して、AB 両者の「余剰」が増大する。強くてやさしい兄 A は、か弱い弟 B をいたわって(4 OPE)、「微笑み」のポジオンとともに援助の手をさしのべる。助けられた(8 SPE) 弟 B は、ポジオンの笑顔とともに兄 A に「敬意」や「感謝」(5 OPD) の気もちをつたえる。それを誇り(1 SPD) に思いながら、A はさらに寛大でやさしい心もち(4 OPE) になるだろう。なお、この交換は、P-P の対称変換(互酬性¹⁶⁾) によるので、シャドーは発生しない。

N ループ

左上から右下の対角線をむすぶ[3 OND―7 SND―6 ONE―2 SNE] の N ループ(Ne-cron Loop) は、ネクロンの応酬によって「負圧」が還流・蓄積する暗いループである。劣位の B を「軽く見る」(3 OND) 優位者 A は、侮蔑的な態度で B を嘲笑する。そのネクロンをまともに吸った B は、どうせ自分は、と「自嘲」(7 SND) しながらも、A に「恨み」(6 ONE) をいだいて反抗するだろう。B の無礼な態度に「怯んだ」(2-SNE) A は、B を卑劣漢と決めつけて、さらに蔑むことになる。こうして両者の間には、侮蔑と嘲笑、不信と冷笑という負圧が還流するネクロン・ループが完成する。ここには露骨な憎しみがあるだけで、ポジオンのシャドーすら存在しない。

16) 互酬性 (reciprocity) については、社会学・人類学の研究と議論の蓄積がある。グールドナー 1970、サーリンズ 1972、ホーマンズ 1950 などを参照。

O ループ

キューブ左手前から右奥へ垂直にスライスした〔2 SNE—4 OPE—7 SND—5 OPD〕の面は、おたがいに相手を称えて自分は遜る愛のループ、O ループ(Other-Positive Self-Negative Loop)である。時間おくれで感謝と負い目が反対方向に還流する「贈り物」の環¹⁷⁾は、このO ループの典型である。たとえば嫁Bが自分を下げて(7 SND)、姑のAをもち上げた(5 OPD)とする。「お追従」であっても嫁のポジオンに気をよくしたAは、「謙譲」の美德(2 SNE)を發揮して、嫁Bにたいしても「お愛想」(4 OPE)を言いながら、笑顔のポジオンを送ったりするかもしれない。このO ループが安定して回るには、相手を上げて自分を下げる、という愛の動作だけでは不十分である。相手もまた、こちらの余剰のために自らを下げて欠如を堪え忍んでいる、ということについての理解(「負い目」の感情)が双方で共有されていることが必要である。日本人がいつも「おかげさまで」「すみません」と頭を下げるのは、私の余剰の影(シャドウ)にアナタの欠如がかくれていることを知っている、ということを手相に伝えるためである。

S ループ

最後に、右手前から左奥に切り出したもうひとつのループについて見る。〔1 SPD—3 OND—8 SPE—6 ONE〕をむすぶこのS ループ(Self-Positive Other-Negative Loop)は、O ループとはちょうど反対に、自分を上げ他者を下げる「欲」に駆動された、「闘争」もしくは「奪い合い」のループである。お互いに相手の負担は私の余剰、と考えるとこの負のループが回りだす。たとえば、何もできない嫁Bを「非難」する(3 OND)ことで姑Aが自分の「優位」を確保した(1 SPD)とする。「負けん気」の強い(8 SPE)嫁Bは、

17) 贈り物をもろうということは、「負い目」を背負うことに等しい。この「負い目」は、他者の権力の源泉である。じっさい、私たちが、友人や部下に奢ることで、一種のパワーが発生する。いつも「奢られて」ばかりいると頭が上がらなくなるのだ。負い目はSNDを要請し、奢った人への尊敬OPDを結果するからである。北米西海岸のネイティブ・アメリカンには「ボトラッチ」という贈り物によって相手を圧倒する祝祭があるほどである。

この負い目を祓う＝払うためには、「お返し」という反対給付が必要となる。このお返しは、贈り物につらう何か限定的なものであることが多く、それが「互酬性」の感覚につながることになる。しかし、このO ループは返礼の可能性を相手の自由なきもちにゆだねる贈与の交換であって、「互酬性」は結果的・事後的に効いてくるにしても、ループの起動因ではない。贈与の始動には、返ってこないかもしれないものを思い切って他者のもとに届ける、「捨て身/決死の跳躍」が必要である。「贈与」における無条件性、計算を度外視した気前のよさの重要性については、交換理論に固執するアングロサクソン系より、フランスのバタユ(1967)などの鋭い洞察の方が参考になる。

ちなみに、敢えて完全な「お返し」をせずに、負い目をしつとりと背負いつづけるのが、「長期無限定互酬」にもとづく日本的な「お蔭さま」の意識である(拙稿「お世話の秤」1995)。「おかげさまで…元気にしております。」という挨拶は、日本人の多くが「私の余剰」を「あなた様の欠如」の「お蔭＝シャドウ」として(宗教的といっているほどの深さで)日常的に感じとっていることと無関係ではない。

トロブリアンド諸島の「クラ交換」(マリノフスキー1922)で、「首輪」のめぐる方向と「腕輪」のめぐる方向が逆になっているのは、真正正銘の贈与でありながら、「負い目」を貯めないために、反対向きの「贈与」(＝お祝い)の環が制度化されている、とみることができよう。

姑 A に「反発」する (6 ONE) だろう。嫁の素直でない態度に傷つけられた姑 A のダイオンは、「誇り」を回復するために (1 SPD)、B の「アラ捜し」 (3 OND) をはじめるだろう。どちらも相手が自分に攻撃をしかけている、と確信して正義のために相手を攻撃するので、このループは轍が深まりこそすれ、ゆるむことがない¹⁸⁾。自分の不幸を相手の「せい」(お陰/シャドー) にすると、この S ループに嵌りやすい。

1-4-3. ループと個人

ソシオネットを駆動するのは、個々のソシオンの自由で個別的な動機や行為そのものではない。個々のソシオンは、互いの予期を呼び寄せ、態度を誘導し、行為を選択しあうことで、ポジオンとネクロンが相互誘導的に還流する超個体的なコミュニケーションのループを形成する。時間をくぐりぬけて (しばしば本人たちの意図に反するかたちで) もとの同じ状態に舞い戻るこの関係性の環、荷重 (セミオン) の循環運動こそ、ソシオンのネットワークをアクチュアルに駆動する基本的な動因である、と考えられる¹⁹⁾。

この節では、いったん回りだすと安定性を示しやすい 6 つのループについて検討した。他者の出方に対する予期も考えると、感情の動作もカップリングのパターンも、かなり多様性を増す。次章では、自他のあいだのデキゴトについての荷重記憶から、一定の予期を発生する荷重変換のモジュールを想定し、その組み合わせによってより複雑なループが形成されるメカニズムを検討する。

2. ダイオン

2-1. ループの記憶

ソシオンであるヒトや集団は、生まれると間もなく他者とのループに組み込まれる。そのループの連環のなかで、保護や援助を受け、迫害や虐待にあい、喧嘩や戦争にも巻き込まれる。このとき、他者との間で発生したデキゴトは、その快/不快の強さに応じて荷重さ

18) この S ループでは、上の O ループとちょうど反対に、おたがいに自己の欠如は相手の自由意志によって意図的にもたらされた、と考えていることが、ループが解けなくなるポイントである。ちなみに、S ループは、他者のせい Sei、O ループは他者のおかげ Okage、とおぼえると記憶しやすい。

19) 時間のトンネルを通して同じ状態へ回帰するものは同一性を獲得する。以上 6 つのループは当事者のサブジェクティブな意図は別にして (なかには、その意図とは逆に) 時間をくぐりぬけてふたたび同一の事態へ回帰する。この場合、同一性 (アイデンティティ) をもつものは個人ではなくループ (関係性) である。個別のソシオンは、たとえ主体を僭称しようとも、ネクロンやポジオンの還流する媒介するループの「僕」となっているにすぎない。

れて生命体の生きた記憶に繰り込まれる²⁰⁾。

荷重は、自他のインターフェイスを構成するソシオンの生きた記憶である。外部の知覚系から類似の他者の像や兆候が入力されたとき、ダイオンは、ループの荷重記憶を起ち上げて、到来しうるデキゴトに対する一定の「予期」²¹⁾ (正負のポテンシャル) を出力する。その時、荷重の備給をうけた対象 (表象や記号の再現前をふくむ) は、記憶されたものとおなじようなデキゴトをもたらしうる力をもつモノとして、それなりのリアリティをもって外部に知覚される。

荷重記憶の形成と予期ポテンシャルの投射は、実際の遭遇に先駆けて自己と他者の関係を先取り制御するための基本的メカニズムであり、ダイオンは2者関係における社会的な免疫機能を担う感情の変換子と考えることができる。

2-2. ダイオンの動作

ダイオンは、ダイアッドのなかでソシオンが形成したサブレベルの荷重変換ユニットであり、その記憶から一定の予期を投射する機能をもつ。荷重は、デキゴトの強さに対応する一定の「強さ」をもち、多くのばあい正/負どちらかに分極する。ダイオンの変換動作は、入力と出力それぞれについて正P/負N、受動r/能動sを組み合わせ、順序を加えると、16種類の動作パターンを類別できる。それぞれが、他者の対応する動作を意識的-無意識的に誘導しながら、相互選択的にカップリングしたとき、ふたたび超個体的な荷重の循環ループを形成する、と考えられる。

まず、それぞれの動作特性を把握しやすくするために、変換動作のパターンを記号的に圧縮して、入力をはじめに記し、つづいて予期出力をその右に記すことにする。入力と出

20) デキゴトを正負に重みづけて、その荷重記憶を即座に予期ポテンシャルに転換するメカニズムは、生体が環境とダイナミックなインターフェイスをつくりあげる根本的な学習メカニズムのひとつと考えることができる。「荷重 semio-weight」は、デキゴト記憶に備給されたこのポテンシャルを概念するための筆者の造語である。この荷重記憶は、主体 (オペレーター-私) の意志や記号操作によってつねに自在に想起できるとはかぎらない。われわれの脳神経系には、その場所に立ち、その匂いを嗅ぐことによってはじめて再現される多くの記憶デキゴトが存在する。デキゴトの荷重記憶は、無意識のレベルをふくむ記憶として、ちょうど免疫系の学習のように、ホルモン-神経系 (身体) から表象言語系 (精神) の深い層に書き込まれるのだろう。

類似の状況やサイン、時刻や場所が入力されたとき、その記憶が呼び起こされ (トラウマのフラッシュバックのように) デキゴトが「再現」される (フロイトの「反復強迫」) と考えられる。賦活された荷重記憶は、ふつう「外部」に定位されて、向こう側から到来する他者性のデキゴトにたいするリアルな「予期」を生み出す。(この「予期」が「外部」ではなく「内部」のデキゴトで、未来ではなく「過去」に属している、と意識されるには、おそらく発達的な学習が必要である)。

21) 「反射」ではなく、「予期」であることに注意してほしい。予期の投射は、すり込みにちかい学習の成果であるが、1対1対応の決定された行動反射ではない。予期ポテンシャルとしての「荷重」は、リアリティをともなったデキゴトの予感であり、対応の「構え」を起ち上げる精神-生理的ポテンシャルである。それは、生きた場面で、意識が指向的に構成する対象の基本的な成分であり、また媒質である。ソシオンの主体は、この予期の潜勢力のうえに立ちながら、その動きを抑制したり、否認したり、誘導したりして、一定の自由度のもとに選択的な介入を遂行する能力をおおかれすくなかれもっている (にすぎない) と考えなければならない。

力がそれぞれ P (posion/positive) か N (necron/negative) かで、PP、PN、NP、NN 4つのパターンの組み合わせがある。さらにそれぞれの動作について能動 s (send) か受動 r (receive) かの「向き」を区別することで、 $4 \times 4 = 16$ の動作パターンが発生する。動作方向については、主体からみて能動を s、受動を r であらわす²²⁾。

能動 s は送り出す (send)、受動 r は受け取る (recept) の頭文字である。たとえば、PsNr の表記は、自己が P (ポジオン/信頼や好意) を他者におくりだす (s) と、他者から N (ネクロン/不信や嫌悪) を受け取る (r) かもしれない、あるいはきっとそうなる、という「予期」が発生するようなダイオンの動作パターンを表現している。反対に、NrPs²³⁾ は、他者から抗議や非難のネクロンをおくられる (Nr) と、自己としてはすぐお詫びや援助のポジオンを返したくなる (Ps)、しなければならない、といった予期が発生するダイオンを表わしている。

つまり、最初に表記された荷重記号 P/N は変換子 (ダイオン) への入力で、その次に示した荷重記号の P/N は、その入力に対応してダイオンが発生する予期出力である。変換パターンを整理するためにタテ軸は入力と出力の対応で、PP、PN、NP、NN の 4 種類の組み合わせをとり、ヨコ軸には ss、sr、rs、rr の順で能動/受動の組み合わせをとる。それぞれを交差させると、16 個のダイオンの動作パターンのマトリックスが構成される (図 7a)。

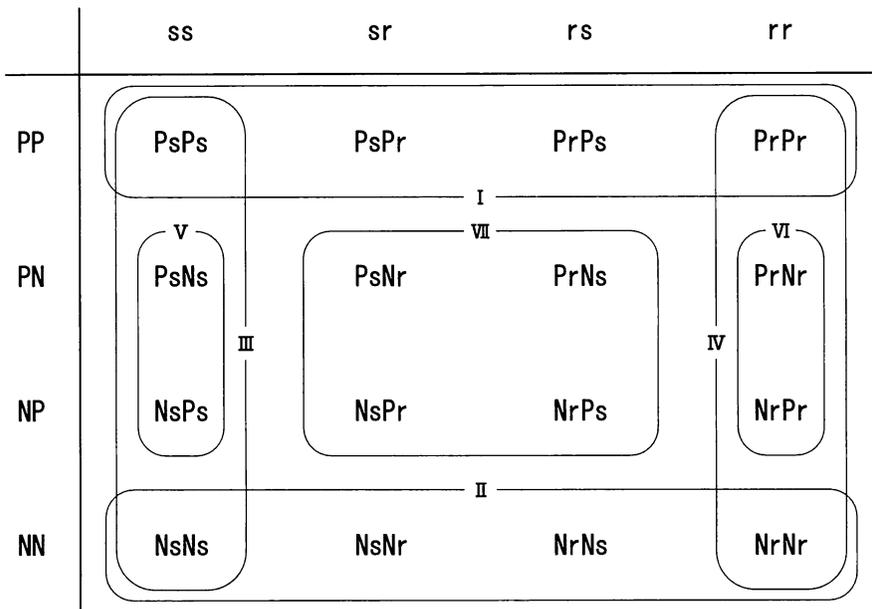
このように入力と出力の対応を同時に表現することで、ソシオンの相互誘導的な荷重コミュニケーションのループ形成をわかりやすく概念し、2 者関係におけるダブル・コンテインジェンシー (お互いの出方が相手の出方に依存する) 問題をより詳細に検討していくことが可能になる。以下、動作パターンの概略を説明しよう。

22) この表記法は、前稿 (木村 2001) で展開した 3 項関係の変換子トリオン trion の記法にならったものである。能動 s (sender) 受動 r (receptor) を P (positive, posion) と N (negative, necron) のあとに付すだけで、指向されている対象を OPD や SNE のようにわざわざ明示しなくても、自己か他者が識別できるメリットがある。

23) PsNr は「裏切られた人」が形成しやすいダイオン、NrPs は「脅された人」が形成しやすいダイオンである。ダイオンの形成過程そのものは、関係における一種の対人的「すり込み」imprinting (ローレンツ 1949) であり、無意識的な学習の結果である。のちにそれなりに修正可能であるとしても、「トラウマ記憶」のように、自由意志でそう簡単に改変できない自動性と固着性をもつ心的装置である、と謙虚にみとめておきたい。フロイトが注目した「反復強迫」や「不安神経症」は、このダイオンの投影動作からくる、と考えることができる。(前者は s 能動性の予期出力、後者は r 受動性の予期出力と整理できるだろう。能動性の予期は自己の強迫動作として、受動性の予期は他者性の不安として他者の側に投射される。)

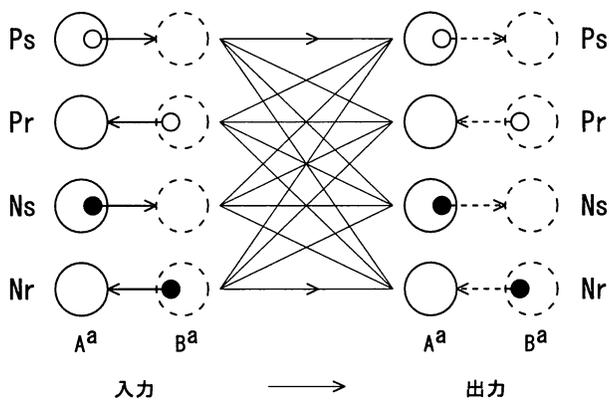
この種の固着は病理的な/ネクロ領域だけで起こるとはかぎらない。信頼にみちた環境で可愛がられて育った人が、疑うことを知らないのは、じっさいに「知らない」のであって、おそらく PrPs のような PP ダイオンを (いわずにポジオン型の「トラウマ」として) 「すり込まれ」たからである。

「基底信頼 (basic trust)」あるいは「基底不信 (distrust/doubt)」が重要なのは、それが緊密な体験のなかで時間をかけてしか形成できない一種の「すり込み」であり、(多分青年期までに) いったん形成されたあとはそう簡単に選択・再構成できないものであり、しかもその上で自由な意識が作動するところの「世界」の基底構造、世界の「リアリティの母胎」となるからである。「ひとりのアナタ」への「基本的信頼」の形成がいかに人間にとって重大なものか、については、本号のもうひとつの木村論文 (池信との共著) をご参照いただきたい。



Iは陽性 IIは陰性 IIIは能動 IVは受動 V VI VIIは非対称ダイオン

図7a ダイオンのセミオタイプ



実線の円は自己 破線の円は他者
左は条件(トリガー)となる入力 右(破線)は出力となる予期ポテンシャル

図7b 変換のダイヤグラム

2-3. ダイオンの出力

2-3-1. PP 変換

PsPs まず、投入される入力がポジティブな荷重 P (ポジオン) であれば、出力されるのも P 荷重であるような変換を検討しよう。1 行目 PP のダイオン変換を左から順に概観する。まず 1 列目の PsPs ($P : A \rightarrow B \Rightarrow P : A \rightarrow B$) は、いちど好意や愛情 (ポジオン) を出力する (Ps) と、さらに愛情を与えたい (Ps)、というパターンである。惜しむことなく愛情や信頼を与える太陽型のダイオンである。母の子にたいする愛情にその典型をみることができよう。

PsPr その横 2 列目の PsPr ($P : A \rightarrow B \Rightarrow P : B \rightarrow A$) は、他者に好意や信頼をよせた (Ps) ら、他者からも好意や信頼が返ってくる (Pr) ことを予期するパターンである。ふつうの人の関係を制御するごくまっとうなダイオンといえる。

PrPs 3 列目の PrPs ($P : B \rightarrow A \Rightarrow P : A \rightarrow B$) は、能動と受動が逆になる。他者から信頼や好意をうけた (Pr) ら、お返しをしたい、しなくては (Ps)、という能動的な予期が自己の側に発生する²⁴⁾。

PrPr 4 列目の PrPr ($P : B \rightarrow A \Rightarrow P : B \rightarrow A$) は、いちど他者から好意を恵まれる (Pr) と、さらに好意を期待する (Pr)、という虫のいい予期を発生するパターンでいわば甘えたダイオンである。手とり足とりでかじづかれると、こうしたダイオンを内面化してしまうかもしれない。

2-3-2. PN 変換

2 行目 PN ダイオンに移る。ポジオンを入力すると、ネクロンが出力される。つまり愛に対して憎しみが生まれるという変換で、すこしわかりにくいパターンをふくむ。

PsNs 左端 1 列目の PsNs ($P : A \rightarrow B \Rightarrow N : A \rightarrow B$) は、他者に好意をいただく (Ps)

24) 3 列目の PrPs と 2 列目の PsPr とは、セットで「互酬性」(reciprocity) と呼ばれる相互に裁可された予期/期待可能性を形成する。これが相手の出方次第という非決定性 (ダブル・コンティンジェンシー) でゆらぐ社会的交換を互酬的に制御する重要な相互予期のユニット (一種の「規範」) になる。お世話になった人にお返しをしたいと思いますのはこの互酬性ダイオン PrPs の働きによる。お世話をした人についてお返しを期待するのは PsPr である。贈与と互酬性についてのごく初歩的な考察は、拙稿「お世話の秤」(木村 1995) を参照。

と、まもなく同じ他者にたいする不信や嫌悪の感情 (Ns) が発生する、というやっかいなダイオンである。後でみるように、初期にある種の振動にさらされたり、内部に禁止をかえたりすると、こうしたアンビバレントなパターンも刷り込まれうるだろう²⁵⁾。

PsNr 2列目のPsNr ($P : A \rightarrow B \Rightarrow N : B \rightarrow A$) は、さらに複雑で、他者に好意を抱く (Ps) と、他者から嫌われる (Nr)、冷たい仕打ちをうけるだろう、かもしれない、という負の予期を発生するダイオンである。一度信頼した人にひどく裏切られたりしたばあいは、こうした不安な予期が発生しても不思議ではない²⁶⁾。

PrNs 3列目のPrNs ($P : B \rightarrow A \Rightarrow N : A \rightarrow B$) では、2列目PsNrと能動と受動が逆転する。他者から好意や信頼をよせられる (Pr) と、反対にこちらが不信や嫌悪あるいは悔りといった負の感情を発生してしまう (Ns)、というやっかいな変換動作である²⁷⁾。疲れたときに子どもに抱きつかれたりすると、だれでもこうした変換がおこるかもしれない。

PrNr さて、2行目の最後4列目のPrNr ($P : B \rightarrow A \Rightarrow N : B \rightarrow A$) である。このダイオンは他者から好意や愛情を示される (Pr) と、つぎに危害をうける予期 (Nr) を発生する。一度甘いことばに騙された被害者は、この種のパターンを内在化するだろう。

2-3-3. NP 変換

NsPs 3行目のNP型のダイオンにうつる。この3行目は、2行目のPN型とは正負の順序が反対になる。まず1列目の全能動型NsPs ($N : A \rightarrow B \Rightarrow P : A \rightarrow B$) はつぎのようである。他者に不信や悪感情をいだいた (Ns) あと、その感情が反転して、いたわりや好意の感情 (Ps) が生まれる変換である。親がこどもを叱った (N) あとに感じる切なさ (P)

25) 愛情を感じたことが条件になって攻撃が発動される、というこのPsNsパターンは、「虐待する親」のケースに当てはまるだろう (斎藤学 1996)。「望まれなかった子」(unwanted child) に対する親の愛と攻撃の(しばしばダブルバインド的な)振動もこのタイプにちかい。この子さえいなければ、といったネクロな思いを一瞬でも抱いてしまった (Ns) その罪ぼろぼしに、もっと愛さなくては (Ps)、とおもう、そんなかたちで、相互因果的に愛情と憎しみが加速増幅される、と考えられる。

ちなみに、この親に育てられた子どもの側には、やさしい素振りをしめされると、かえっておびえるという4列目のパターンPrNrが学習されるだろう。このパターンは、悲劇的なことに、「可愛げがない」としてさらに親の攻撃を誘発する確率が高い。これと呼応するように、子どもの側からすると、虐待される (Nr) ほどに、この苦しみに耐えればこんどこそ可愛がってもらえる (Pr)、という切ない「予期」が生まれる可能性もある。

26) うっかり気を許すと酷い目にあう、とかいったパターンである。相手に愛情や好意を感じる、というのがダイオンへの入力Psで、酷い目にあって傷つけられるだろう、という予期が出力Nrである。

27) PrNsとPsNrは能動/受動のちがいがあただけで、転写される。甘やかされて (Pr) わがままに育った (Ns) 子ども (PrNs) が親になると、子どもに対する能動受動が逆転して、すこしでも甘やかしたら (Ps) わがままになって親に逆らうだろう (Nr) という予期 (PsNr) を形成しやすいかもしれない。

などはこの変換の一例と考えられる。一度ループをつくとこのNsPsはPsNsと区別しにくい。

NsPr 2列目 NsPr ($N : A \rightarrow B \Rightarrow P : B \rightarrow A$) は、他者に攻撃性を送り出すことで、他者の愛情や信頼を期待する、という一見奇妙な変換である。しかし、叱りつければ(Ns)、子ども(あるいは生徒や部下)は言うことを聞く、つまり尊敬や好意を示すはずだ(Pr)、と思込んでいる大人(教師や上司)は案外おおいのではないだろうか。

NrPs 3列目は能動と受動が逆転して、NrPs ($N : B \rightarrow A \Rightarrow P : A \rightarrow B$)となる。他者から負を振り込まれる(Nr)と、好意とまでいかなくても、服従を示してしまう(Pr)パターンである。素直で小心な子どもや生徒は、自分を叱りつける親や先生に畏怖や敬愛の念を持ちやすい²⁸⁾。

NrPr 最後4列目は全受動型のNPダイオン、NrPr ($N : B \rightarrow A \Rightarrow P : B \rightarrow A$)である。他者から冷たい仕打ちを受ける(Nr)と、つづいて愛情やいたわりを予期してしまう(Pr)、というかなり奇妙な変換であるが、しかし、たとえば愛憎で振動する親NsPsに育てられた子どもは、この種のダイオンを内在化しても不思議ではない。

2-3-4. NN変換

NsNs 4行目のNN型のパターンにうつる。1列目NsNs ($N : A \rightarrow B \Rightarrow N : A \rightarrow B$)は、いったんだれかを嫌いになる(Ns)とますます嫌いになる(Ns)、という攻撃的なダイオンである。いつも愚痴をこぼしたり、あたりちらしてばかりいる人はこのダイオンに駆動されていることになる。

NsNr 2列目のNsNr ($N : A \rightarrow B \Rightarrow N : B \rightarrow A$)は、自分が嫌っている(Ns)人には嫌われている(Nr)のように感じさせるダイオンである。ひどい目にあわせたんだからきつと恨んでいるだろう、というもこのダイオンの働きである。

28) どっちが虐待したか、愛したかは本人にとっては重要だが、ループの外から見ているかぎり、ニワトリが先かタマゴが先かの問題にすぎない。ループのなかで(「私の物語」のために)因果を逆転して「記憶を書きかえる」(I. ハッキング1994)ことは十分に可能である。

NrNs 3列目の NrNs ($N : B \rightarrow A \Rightarrow N : A \rightarrow B$) は NsNr の逆である。不当な攻撃にたいして、許せない！という怒りを生み出す復讐のダイオンである。罵倒されたり侮辱されたら (Nr)、反感をもつ (Ns) のは人間としてしごく当然の反応である。

NrNr 4列目の NrNr ($N : B \rightarrow A \Rightarrow N : B \rightarrow A$) は全受動型のネクロダイオンである。一度攻撃される (Nr) と、今度会ったらまた攻撃されるのではないか (Nr)、と脅えるのはこのダイオンによる。いつも虐められている子どもや大人は、明日はもっと虐められる、という不安や妄想に駆られやすいだろう。

2-4. ダイオンの分類

2-4-1. 陽性と陰性

前章ではダイオンの動作特性について個別的に見てきた。この章では、マトリックスの次元別にダイオンのパターンを集合的に類別し、各カテゴリーの動作特性を整理する。まず、自他のあいだで交換される荷重の正負について分類する。

PP 陽性型

図7aのマトリックスの上部1行目をご覧いただきたい。PsPs、PsPr、PrPs、PrPrの4種類のPP型ダイオンがならんでいる(I)。入力も予期出力もポジオンという「陽性」のダイオンである。このクラスIでは、他者とやり取りするのは、もらうにしろあげるにしろ愛情や好意といったプラスの荷重となる。

NN 陰性型

これに対し、マトリックス底部の4行目には、NsNs、NsNr、NrNs、NrNrの4つのNN型ダイオンが配列されている(II)。このクラスIIは入力も出力も「陰性」のネクロン型ダイオンの集まりである。他者とやり取りされるのは、怒りや呪いのような負の荷重に限られる。

PN 反転型

真中の2行目はPN型、3行目はNP型で、自他のあいだで交換される荷重がPに対してN、Nに対してPと反転するダイオンのクラスターである。愛されると憎んだり、虐めて可愛がったり、社会化された常識人からはすこしわかりにくい反対称の変換であるが、

その分理的には興味ぶかいタイプが含まれている。

2-4-2. 能動と受動

ss 型

つぎに、マトリックスをタテに能動と受動の次元にそって類別してみよう。まず左端1列目に PsPs、PsNs、NsPs、NsNs の4つのダイオンがならんでいる(III)。どれも、ポジオンにしろネクロンにしろ自から他へ放出する一方の ss タイプのダイオンである。入力も能動、出力も能動なので「超能動型」とよぼう。

rr 型

これに対し、右端タテの列のダイオンは、PrPr、PrNr、NrPr、NrNr の4種類である(クラスターIV)。これらはどれも、入力も出力も他者からこうむる一方の rr タイプのダイオンなので、「超受動型」とよぶ。1行目が PP で陽性、2行目と3行目が PN、NP で反転型、4行目が NN で陰性である。すぐあとで見るように、この超受動 rr 型(IV)は、超能動 ss 型(III)の対応するダイオンと相補的に結合して安定ループをつくりやすい。

sr 型

2列目は、PsPr、PsNr、NsPr、NsNr の4種類である。どれも、投入した入力に対して他者からの応答を予期するという意味で、受動型のダイオンである。あるいは返答待ちという点で、「待ち受け型」といってもいい。とくに、2行目 PsNr と3行目 NsPr が能動入力と受動性の予期が PN 反転しており、非対称性の要注意ダイオンである。

rs 型

3列目は、PrPs、PrNs、NrPs、NrNs の4種である。この4つのタイプは、他者から投入された入力に対して、それぞれなにかしかの予期を能動的に出力する「お返し型」のダイオンである。PrPs と NrNs は互酬的(「目には目を、歯には歯を」)でわかりやすいが、やはり2行目 PrNs と3行目 NrPs は、もらうものとあたえるものが NP 反転しており要注意である。

これら3列目の PrNs と NrPs と、2列目の PsNr と NsPr の非対称性ダイオンをいっしょにしてマトリックスの中心部にカテゴリ-VIIとしてまとめた。これらVIIのダイオンは、PN 反転したまま相補的に結合して、のちにみるように、もつれた関係をつくりやすい。

2-5. ダイオンの連結

各カテゴリーのダイオンは、対応するカテゴリーのダイオンと受動-能動でちょうどソケットとプラグのように相補的にカップリングしやすい。投射された予期がちょうど相手の対応する反応を誘導・解発しやすいからである。ダイオンの荷重パターン（後出のセミオタイプ）は、特定のカップリングにたいするレディネスあるいは促通性をもつ、といっていだらう²⁹⁾。以下、能動型と受動型で相補結合を形成しやすいダイオンの可能なカップリングパターンを簡単に検討する。

2-5-1. 一方型

保護連結

PsPs は陽性の超能動型のダイオンで、無限の愛（ポジオン）の湧き出しをもつ太陽のような人や、慈しみの尽きることのない母や仏のようなタイプに相当する。これに対し PrPr は陽性の超受動型で、赤ちゃんや甘えん坊など他者の愛情を当てにするタイプにあたる³⁰⁾。PsPs と PrPr がカップリングすると、母子関係にみられるようなポジオン性の保護的な共生態が形成される。

虐待連結

これに対し陰性超能動ダイオン NsNs は、限りなく憎しみ/ネクロンが湧出するこわい人、つまり「鬼」のダイオンである。4行目右端の超受動型 NrNr は、その鬼の餌食となる犠牲者のダイオンである。NsNs が鬼母であるばあい、逃げることもできない子どもは、相補的に NrNr タイプのダイオンを形成せざるをえないだらう³¹⁾。虐待者と恐怖に脅える不幸な犠牲者のカップリングである。

29) たとえば、偉そうにそり返っている (Pr) 人についてお辞儀をしたり (Ps)、逆にいじけた人 (Nr) を見るとつい邪険に扱ったり (Ns)、といったことがある。怖そうな人 (Ns) についてこべこ (Ps) したり、あるいはびくびく (Nr) したりするのも同様である。やさしそうな人 (Ps) をみると反射的に悪意をいだく (Ns) といったこともあるかもしれない。いずれも、それぞれのソシオンがループの中で学習した荷重記憶の投射によるもので、ほとんど自動的で、しかもしばしば無意識的な動作であるところに、おおきな意味がある。(たとえば、すこし脅されてすぐ怯える人は、自分の反射的な怯え (の目やしぐさ) には気づかないかもしれない。しかし、脅しの上手な人 (NsPr 型) は相手の怯えた気配を敏感に嗅ぎ取るのである。)

30) 23 頁でもふれたように、甘やかされすぎると、PrPr 型のスポイルされたタイプができあがる。このタイプが、他者から与えられて当然と考える 2 番目の P (ポジオン) をもらえなかったとき、逆して N (ネクロン) を贈りつづけるストーカーになるのかもしれない。福祉や援助に依存しすぎると、人も国もなぜもってくれないのか、もらえないのか、などという気分になりやすいが、これなどもおそらくおなじタイプのダイオン変換による荷重感情である。注 34) の「プロテストイング・パラサイト」を参照。

31) 2001 年関西地方で 25 才の両親が 6 才の男の子に虐待をくりかえしたあげく、死体をゴミ袋に入れて運河に捨てるという痛ましい事件があった。鬼というのはこういうヒトのことを指す言葉であろう。逆にいえば、ヒトとは鬼になりうる存在である (特に他者を「邪悪な存在」と思いこんだ場合には)。

2-5-2. 互酬型

PP型、NN型それぞれのダイオンのうち、2列目 sr タイプ、3列目 rs タイプの2種類は、能動と受動が自他のあいだで反対になるダイオンである。陽性のPP、陰性のNNどちらも、やり取りされる荷重が対称性(反射性)をもち、「目には目を、歯には歯を」という予期を生み出すので、ふつうの「人間」には、体験的にもわかりやすい。「互酬性」の感覚を駆動する常識派のダイオンである、といえよう。

陽性連結

陽性のPsPrは、他者に好意や信頼を抱いたばあい、他者からそれに対応するプラスの荷重を期待する。PrPsは、逆に他者からなにかポジティブな荷重を送られたばあい、それに対応するものをお返しするよう促す。両者が相補的に連結されると、ポジオンのレシプロカルなやりとりが可能になる。つまり、2者のあいだをプラスの予期ポテンシャルが循環するコミュニケーション・ループ(17頁のPループ)が形成される。このPsPrとPrPsのカップリングは、2者を相互的な共生へと導く基本的な社会結合であることはいうまでもない。

陰性連結

陰性のNsNrとNrNsもおなじように相補結合して、ネクロンの循環するループ(Nループ)を生み出す。NsNr出力受動型は、自分が加えた危害を他者はきつと怨んでいるだろう、と「復讐」の不安に脅え、NrNsは、反対に自分が受けた侮辱をいつかお返ししようと復讐の機会を窺う。このネクロンの環は、いったん回り始めると、因果が循環して、自ら予言を実現する。しかも、それぞれの仇討ちの「正義」(負の互酬性)によって駆動されるため、よく知られているように、締まることはあってもなかなか解けることはない³²⁾。

32) 陽性の出力受動型PsPrと能動型PrPs、陰性の出力受動型NsNrと能動型NrNsはいったんカップリングすると、どちらも能動受動の区別がつけにくくなる。つまり、回転するループのなかでは、入るから出るのか、出したから入るのかは、先にどちらに注目するかのちがいで、ニワトリとタマゴのような因果の循環が成立することに注意したい。Pループのばあいはさほど問題にならないが、Nループ(とSループ)の場合は、おたがいに自分の非Nsは忘れて/気づかずに、自分をもつばら受動Nr側の被害者とすること、つまり「相手のせい」にすることが、ネクロンを防衛的に加速して、どちらも望んではいない負の事態をいっそう強化・固定することにつながる。(18頁を参照。)それぞれは個体保全のために局所合理的に反応しながら、システムとしては相互因果的に相互破壊へと落ち込んでいくことになるこのダイアッドのシステムダイナミックスを、古代ギリシャ人は個体を超えた復讐の女神ネメシスの意志として概念したのかもしれない。

2-5-3. 振動型

入力と出力で P (ポジオン) N (ネクロン) が反転するダイオンも能動型と受動型で相補的にカップリングする。このダイオンの反転動作は、しばしばループを振動させ、周囲の人や本人を困難な状況に陥れる。ループが振動しながらもそれなりに回転しつづけると、当人たちも意図しないかたちで、不本意にも深みにはまり、あがくほどに轍から出られなくなるおそれがある。

脅えと渴望

超能動 ss 型 (III) からみていこう。2 行目の PsNs と 3 行目の NsPs はいったんループをつくと区別できなくなることがおおい。憎い (Ns) とおもうとしばらくして可愛そう (Ps) になり、可愛いとおもう (Ps) と憎たらしくなる (Ns) うちに、可愛いと憎たらしいの感情の波が交互にやってきて、この振動で PN もろともに増幅されていく、といった事態が生まれうるだろう。

これと相補的にカップリングするのが 4 列目の超受動型ダイオン、PrNr と NrPr のふたつである。このふたつも、高速で回るループのなかでは区別できない。甘やかされた (Pr) すぐそのあとに虐待つまりひどく叱られ (Nr)、ひどい折檻 (Nr) のすぐあとに抱きしめられたり (Pr) するうちに、「愛されると脅えがはしり、脅えながら愛を渴望する³³⁾」悲しい体勢が形成され得るだろうことは合理的に推測できる。

甘えと反抗

2 列目 sr 型 PsNr が 3 列目 rs 型 PrNs とカップリングすると、甘えと反抗の非対称結合が形成される。PsNr を優位の A、PrNs を劣位の B としよう。A は B を甘やかす (Ps) と増長して反抗的になる (Nr) と予期し、B は甘い人 (Pr) をみるとつい見くびって反抗したくなる (Ns) タイプである。このふたりがいったんループをつくと、おもしろいことに因果が反転し、両者の「予言」は相互誘導的に実現しあうことになる。つまり、A は反抗される (Nr) と B を甘やかす (Ps)、B は反抗する (Ns) ことで、A から愛情を手

33) いじめっ子に虐められながら遊んでもらうことを期待する子どもや、権力者の攻撃的な処罰にあいながら許しや救済を期待する人や国家も同様である。

親子の虐待にもどって、この子どもの側の超受動型 PN ダイオン、PrNr は、親からみると、「遊んでやろうとおもったのに脅えて寄ってこない」(Ps+notPr) で、ほとんど PsNr とおなじと受け止められる(「かわいげがない」)。その子のまさにその反応が、親にその子をいっそう憎たらしくおませ、さらに虐待を誘発する (PsNs) 理由である、と思われる。もし子どもがそんな親に反感をもって睨みつけたとしたら事態はさらに悪化する可能性がたかい。子どもの側としては、まともな人間の「Nr ならば Ns」という対称性原理(歯には歯を)に従ったまでだが、親としては、「親に対してなんだその反抗的な目は！」(Ps に Nr) となって、さらに虐待を正当化することになりかねないからだ。

入れる (Pr)。こうして、暴れるといやいや愛情 (や援助) をさしだすあやしい愛と、小出しの愛を手に入れるともっとよこせ、と反抗をエスカレートさせる卑しい抗議がループをつくって回転する³⁴⁾。今日、親と子、先生と生徒、権力者と民衆などのあいだで、そんな事例を探すのに苦労はしない。

支配と服従

3行2列目のNsPrと3列目のNrPsのカップリングも興味深い。叱りつけたら (Ns) おとなしく言うことを聞く (Pr) だろうとAは「予期」し、Bは叱られた (Nr) ので、言うことを聞かなくては (Ps) という服従の「予期」を出力する。このループもいったん形成されると不思議に安定することがある。AのダイオンNsPrは攻撃する (Ns) と愛される (Pr)、あるいはしかりつけると尊敬されるだろうという奇妙な予期を生み、BのダイオンNrPsは攻撃されると (Nr) 愛情を感じてしまう (Ps)、あるいは叱られると尊敬してしまう、といったこれまた不思議な感情を発生する。

しかし、Bの恭順 (Ps) が、恐怖 (Nr) のシャドウでしかなく、Aの誇り (Pr) も、侮蔑 (Ns) のシャドウでしかないとき、このDループは恐怖政治の様相を帯びざるをえない。Bがしたがう (Pr) のをいいことに、Aは尊敬が十分でない威張りだし (Ns)、BはBで、服従する (Ps) たびにまた怒られる (Nr) のではないかと怯えてさらに跪くだろう。まさに支配と服従の権力関係の発生である。

ループの因果

ちなみに、回帰するループのなかでは、一般に原因と結果は特定しにくい。たとえば、嫌う (Ns) ので嫌われる (Nr) のか、嫌われる (Nr) から嫌う (Ns) のかは、たがいに憎しみあってネクロンの回る環のなかでは見分けがつかない³⁵⁾。これは、愛した (Ps) ので愛される (Pr) のか、愛された (Pr) ので愛する (Ps) のか、愛のループが回りだした

34) 抗議されると謝罪し、謝罪 (や援助) を獲得すると、さらに抗議をエスカレートする運動体や国家間の関係は、ベースに信頼をもたないばあい、ネクロ・ループへと顔落していかざるをえない。ちなみに、抗議することによって利得を得ようとするこの種のネクロン性のダイオンを、「プロテストイング・パラサイト protesting parasite」、略して「プロバラ」とよぶことにしたい。プロバラの蔓延は、人権を標榜する民主主義社会にはびこる風土病となりつつあるように思われる。なお、優位者AがNsPrとなるばあいは、ただのパラサイト、というより本来の「収奪者」(ルーリング・パラサイト!) である。

35) ニワトリとタマゴがどちらが先かのように、無愛想だからきらわれるのか、きらわれるから無愛想なのか、原因と結果を決めることは困難である。魔女は魔女だから招かれなかったのではなく、招かれなかったから魔女になった可能性が高い。

夫婦喧嘩はどちらがさきに原因をつくったかでもめるのがふつうである。国家間の因縁の戦いも、しばしば因果が錯綜・循環する。どちらの原因も、どこまでさかのぼるか次第でどのようにでも書き換えられるのは知っておりである。夫婦は、そもそもアナタと結婚したのがまちがいのもとだった、となったとき離婚という道があるが、国家や民族は、「離婚」してアメリカ新大陸を目指した幸福な時代をのぞいて) 戦うより他に道がない、というのが現状のようである。

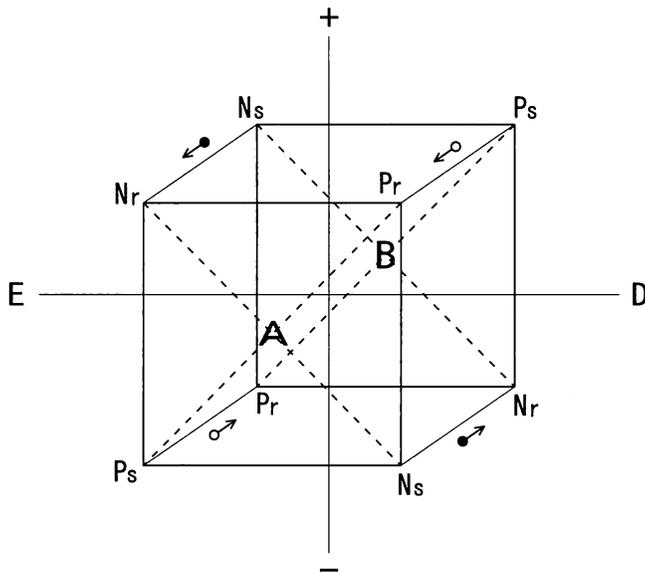
A	ss	sr	rs	rr	B	ss	sr	rs	rr
PP	PsPs	PsPr	PrPs	PrPr	PP	PsPs	PsPr	PrPs	PrPr
PN	PsNs	PsNr	PrNs	PrNr	PN	PsNs	PsNr	PrNs	PrNr
NP	NsPs	NsPr	NrPs	NrPr	NP	NsPs	NsPr	NrPs	NrPr
NN	NsNs	NsNr	NrNs	NrNr	NN	NsNs	NsNr	NrNs	NrNr

1. Aの荷重パターン

2. Bの荷重パターン

A, Bそれぞれの PP, PN, NP, NN ダイオンの s(能動)と r(受動)タイプが相補的にカップリングする(たとえば A:NsPrとB:NrPs)

図8a セミオタイプの相互誘導



Aの Pr, Nr, Ns, Ps は 図3の 1-SPD, 2-SNE, 3-OND, 4-OPE に対応し
Bの Ps, Ns, Nr, Pr は 5-OPD, 6-ONE, 7-SND, 8-SPE にほぼ対応する

図8b キューブとセミオレセプター

らわからないのと同様である。甘やかす (Ps) ので増長して反抗的になる (Nr) のか、反抗される (Nr) ので甘やかす (Ps) のか、どちらも正しい「解釈」でありうる。しかし、サブレベルにおけるそうした理由づけがどうであれ、それぞれの生み出す「物語」にもか

かわらず、ただ悪循環だけがオブジェクティブな「事実」となりうる³⁶⁾。

2-6. ネットワーク

2-6-1. 可能性の選択

ダイオンは、他者からの能動的 (s) あるいは受動的 (r) な P (ポジオン) もしくは N (ネクロン) の荷重入力に対して、かつて組みこまれていたループの記憶つまり 2 者関係の学習効果として、一定の予期ポテンシャルを選択的(しばしば無意識的)に出力する(図 7b)。この予期出力は他者のダイオンに入力として送りこまれ、他者の選択的な出力を誘発する。この他者の出力が自己に帰還されてその予期と適合したとき、両者のダイオン変換は相互選択的に強化されて、荷重コミュニケーションの安定したループが誕生する。ソシオン A と B の 2 つの自由度 (選択性) をカップリングするこれらのループは、相互に予期の予期を形成し、相手方の対応を誘導することを通して、関係の不確定性を縮減して、そこに「情報」つまり選択的な秩序を発生させる³⁷⁾。

2-6-2. セミオタイプ

ダイオンはループの記憶から自他の可能な対応についての予期を投射して関係の不確定性を縮減する。ダイオンの荷重変換パターン (セミオタイプ) は、A/B (自/他)、s/r (能動/受動)、P/N (正/負) で、すくなくとも 16 の動作タイプが識別される。

トリオンは、3 者関係 (triad) における荷重変換子であり、おなじく条件入力にたいして、予期出力を投射する。トリオンのセミオタイプは、前稿(「ソシオンの一般理論(III)」)で述べたように、不安定トリオンをふくめて $96 \times 2 = 192$ 、安定トリオン³⁸⁾ のパターンに限っても 16、入力と出力の順序を区別する (循環 J、反射 H、誘導 Y) とその 3 倍で 48、さらにそれぞれの関係に優劣、強弱を区別すると、その 8 倍の 384 という膨大なパターンになる。

36) 自由度 2 のループは、しばしば予期を相互に誘導実現しあう。社会学では、取り付け騒ぎなどを対象にしたマーソンの「予言の自己実現」(R.K. マートン 1949) の概念や、不良のレッテルを貼られることと非行の問題を議論した「ラベリング理論」(大村英昭 1989、徳岡秀雄 1987) などが、予期の相互誘導による悪循環に注目した研究として知られている。

37) キューブモデルは自由度 2 のカップリング問題をヴィジュアルに捉えて思考するためのひとつの幾何学的道具となることを狙っている。

38) トリオンは 3 項すべての関係が P か、あるいは N 関係が 2 個あるとき、荷重変換について安定する。安定トリオンは PPP、PNN、NNP、NPN の 4 種あって、ダイオンよりもさらに高次の推論的な演算性したがって予測性をもつ予期ポテンシャル (であるはずだ、あってはならない、はずがないなど) を出力する。ちなみに、 $N \times N \rightarrow P$ の変換を最初に発想したのはバランス理論の F. ハイダー (1958) である。本来サブレベルで構成される $N \times N$ 変換論理を、階層をわきまえないままオブレベルに投影して「否定の否定は肯定」とばかり現実を破壊して歩いたのがマルクス主義の「弁証法論理」(広松渉 1980) であったように思われる。

ダイオンとトリオンの変換パターンを細胞免疫の「イデオタイプ」にちなんでセミオタイプ (semio-type) とよぼう。セミオタイプは、对人的動作を予期制御によって選択的に駆動あるいは誘導する荷重変換子の特異的なパターンであり、広い意味の社会的性格の原型を構成する³⁹⁾、と考えられる。

2-6-3. ネットワークの免疫

ダイオンとトリオンは自他を分別し、攻撃と防御を指令・制御するソシオネットの免疫機能子であり、セミオタイプはネットワークにおけるそれらの特異的な動作パターンである。社会システムは、セミオタイプの生きた複合構成態であり、それらの潜在構造が多重に連結された可能性のネットワークである。セミオタイプの自由度とその連結の多様性は、社会システムにおける情報量つまり連結可能性のストックであり、システムに自己組織化を促すネグエントロピーの源泉である。

ダイオンとトリオンは、サブレベル (L2) で予期ポテンシャル (意味と感情、意志や予感) を発生して、オブジェクトレベル (L1) でソシオンの行動を駆動あるいは誘導する。ソシオンは、それぞれ学習されたセミオタイプの変換パターンに導かれて自他の予期を相互選択的に誘導あるいは抑止しながら、共同的に、あるいは競合的に、《くり込みーくり出し変換》を重ねてそれなりのソシオネットを組み上げる。その変換の合成の筋道を論理的にたどることが、ソシオン理論の残された課題である。次章では、キューブモデルを差異とその変化率で定義された状相空間と捉え、システムの変動を記述するための簡便な視座とツールを探索する。

39) 「反社会的性格」とよばれるものも、一種の社会的性格である。異常、病理とよばれるもののおおくは、ほとんどが異常でもなく、病理でもない。それは単に、本人が生きにくかったり周囲が対処しにくかったりして、困ったり困らされたりするだけの話である。殺人者もストーカーも嘘つきも飲んだくれも、理解可能なしかし少々特異なセミオタイプをもつ人類のひとりにすぎないのであって、まともな「ホモ・サピエンス」でないわけではないことは明らかである。彼らを「ひとでなし!」と呼びたいのであれば、「ひと」とは何か、「人間」とは何かを定義しなければならない。その意味では、セミオタイプの事例説明で比喩的にあげたように、NsNsを「鬼」、PsPsを「仏」、PsPr、PrPsとNsNr、NrNsを「人間」、と呼ぶのは案外科学的かもしれない。PN、NPタイプの人びとがなにか困った問題を起こしたときは、まずは個体の病理や異常ととらえるよりも、ループの病理、セミオタイプの組み合わせの悪さからくる関係の機能障害、ループが轍(わだち)にはまって出られなくなったストック障害としてとらえ、そのうえでゆっくり解きほぐす方途を考えるべきであるのかもしれない。

ちなみに、「愛」と「憎しみ」/「信」と「不信」をネットワークの免疫の問題として捉えたのはおそらくN. ルーマン (1984) が最初である。

3. ソシオネットの力学系

欲望によるソシオンの運動を記述するために、荷重差とその（絶対値の）変化率で定義されたソシオン・ネットワークの状相空間（phase space）を構成し、4つのフェイズとその力学を検討する。

3-1. ソシオネットの状相

3-1-1. 荷重差と変化率

1) あるネットワーク内で任意のソシオン S_i が検出した自己 S と主要な他者（たち） O との荷重差の総計 $D = \sum II - I$ を考える。

正の荷重差 $D > 0$ は信頼や好感度（あるいは富や名誉）のような「余剰」、負の荷重差 $D < 0$ は不信や嫌われ度（あるいは貧困や不名誉）といった「欠如」に相当する。

2) xy 座標において、点 $P_i(x, y)$ は荷重差をめぐるソシオン S_i の状態を表わすものとする。 $P_i(x, y)$ の y の値は荷重差の合成値 $\sum D$ （つまり余剰あるいは欠如の総量）を、 x の値はその荷重差の絶対値 $|D|$ の変化率 $(d|D|/dt)$ を表わす⁴⁰⁾。

$$\begin{aligned} x &= d|y|/dt \\ y &= \sum D (II - I) \end{aligned}$$

3) 点 P が原点より y 軸方向を「上」($y > 0$) に位置するほどプラスの差異（荷重差の余剰分）が大きく、「下」($y < 0$) に位置するほどマイナスの差異（荷重差の欠如分）の値が大きい。

4) また、 x 軸方向を原点より「右」($x > 0$) へ行くほど荷重差（の絶対値）が拡大する速度が大きくなる ($d|D|/dt > 0$)。反対に原点より「左」($x < 0$) へ行くほど荷重差が縮小する速度が大きくなる ($d|D|/dt < 0$)。つまり、 y 軸 ($x = 0$) より右側では差異化 (differentiation) がより進展し、左側では平等化 (equalization) がいっそう進展する。

40) 荷重差とその変化速度で定義された状相空間の各点 P に、さらに加速度と速度をベクトルとして対応させることで、点 P の運動（システムの状態）を視覚化して幾何学的に思考することができる。点 P の各位置にベクトルを対応させることは、空間に「矢印」をばら撒くことに等しい。この手法は、物理学で力学系 dynamical system として知られ、時間のなかにかくれている運動のモメントを可視化して、システムの挙動を幾何学的軌道として表現する重要なツールである。

3-1-2. ソシオン空間上の流れ

1) 荷重差とその変化率で定義されたこの状相空間（ソシオン・スペース *socion-space* とよぼう）において、任意の点 $P(x, y)$ にベクトル $P(dx/dt, x)$ を対応させる。

$$\begin{aligned} x &\longrightarrow dx/dt \\ y &\longrightarrow x \end{aligned}$$

この対応は、ソシオスペース上に一定の「流れ」を生成する。この流れをもっとも単純化して表わしたのが図9cである。

この流れによって、任意のソシオン S （個人あるいは集人）が他者との比較によって辿るプロセスを、上昇や転落の軌道として幾何学的に記述することができる。

2) 点 P に対応するベクトル P の x 成分は差異の変化する速度の微分、つまり加速度を表わし、垂直の y 成分は差異の変化率である速度を表わす。なおベクトルの起点である点 P の位置自体は、 y 座標が差異の正負大小を、 x 座標がその絶対値の変化率に対応していることに変わりはない。

3) 状相空間（ソシオスペース）の上半分 ($y > 0$) は「余剰」（余裕・楽）である。下半分 ($y < 0$) は「欠如」（負圧・苦）である。 y 軸を上部にいくほど愛や信頼、富や名誉といった資源が余剰になり、「貴族」「特権階級」などいわゆる「持てる者」が位置する（図9cの点R「大富豪」）。マイナス方向つまり原点から下方に移動すると、反対に憎悪や不信、貧困や不名誉といった負の資源が蓄積して、「奴隷」「賤民」「囚人」など「持たざる者」（図9cの点P「貧民」）などが位置を占める。ちなみに、位相図の水平線 ($y = 0$) 付近にいるのは、「上流」でも「下層」でもないほどほどの「平民」である。

4) y 軸より右側の I、IV象限 ($x > 0$) は、信用や富や人気などの差異が拡大する領域である。象限 I では上にむかって差異が拡大し (PD)、象限 IV では下にむかって負の差異が大きくなる (ND)。原点から右方向へいくほど、差異が拡大する速度が大きい。

逆に左側の領域 II、III象限 ($x < 0$) では、差異が縮小する。II では下にむかう流れで余剰が減少し (NE)、III では上に向かう流れで欠如が減少する (PE)。左に行くほど平等化による同化の速度が速くなる。

5) y 軸 ($x = 0$) の近傍では差異が変化しないので、ネットワークの階層が上も下も固定化し、カースト化する（「冷たい社会」）。 y 軸から左右に遠ざかるほどネットワークの「温

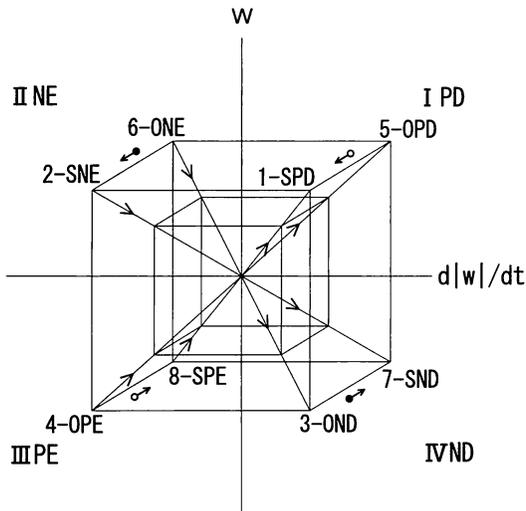


図 9 a キューブの座標 1

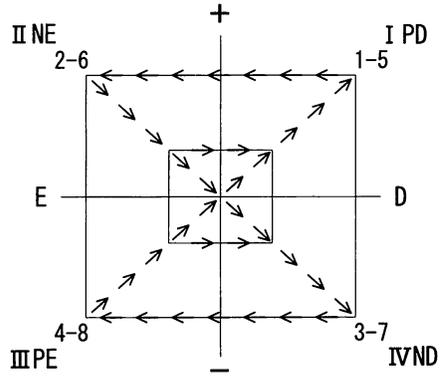
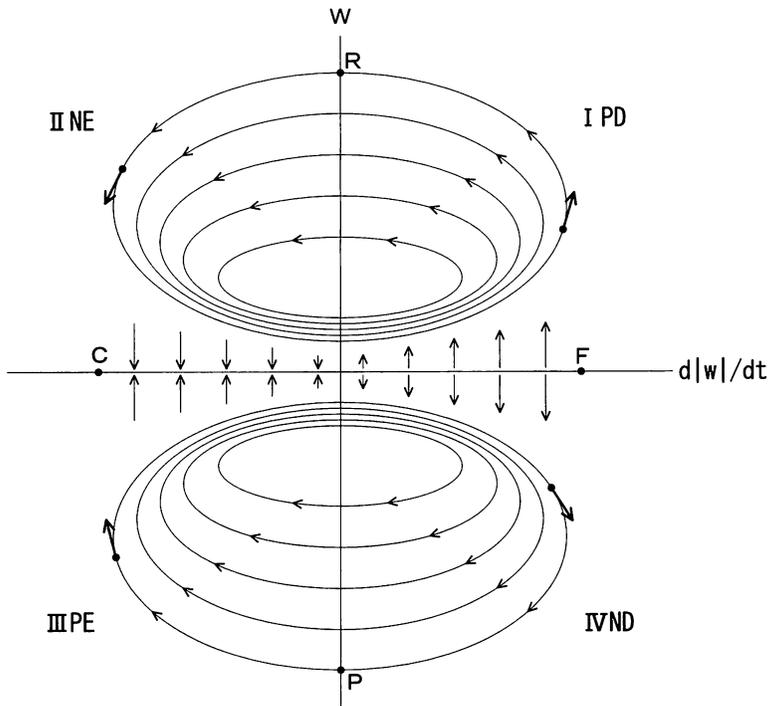


図 9 b キューブの座標 2



F:フロンティア C:コミュニン R:富豪 P:貧民

図 9 c ソシオン空間上の流れ

度」が高くなり（「集合的沸騰」、人びとは「熱」にうかされる（右の熱狂はF「フロンティア」、左の熱狂はC「コミュニケーション」）。

3-1-3. 4つの象限

ソシオン・スペースにおいてソシオンの状態を変化させる力は、愛と欲望による荷重のコミュニケーションである。各象限に特有の荷重子とコミュニケーションのモードが存在する。改めて、象限別に簡単に整理しておこう（図9a、9b）。

PD (I)

第I象限では、 $\langle 1 \text{ ほこる} \times 5 \text{ たたえる} \rangle$ の荷重コミュニケーションで「卓越」への運動（「力への意志」）が発生する。優越をめざすAの欲望と卓越を称えるBの愛が連結されて、「誇り」と「尊敬」といった正の荷重子ポジションが交換される。つまり、Aの「人気」や「自信」がいつそう高まる（ $w > 0, dw/dt > 0$ ）。

ND (IV)

第IV象限では $\langle 3 \text{ さげすむ} \times 7 \text{ いやしむ} \rangle$ のコミュニケーションで「排除」の運動が発生する。「嘲り」や「軽蔑」といった負の荷重子ネutronがAからBへ放射されてBの負性が増し、マイナスの差異が一層拡大する。つまり、Bの「不人気」や「自虐」が深まる（ $w < 0, dw/dt < 0$ ）。

NE (II)

第II象限では $\langle 6 \text{ ねたむ} \times 2 \text{ つつしむ} \rangle$ のコミュニケーションによって余剰を減少させる下向きの運動が発生する。比較劣位者Bから優位者Aへ「嫉妬」や「非難」のようなネutronが送られ、自重や謙譲によってAの余剰が減少する（ $w > 0, dw/dt < 0$ ）。

PE (III)

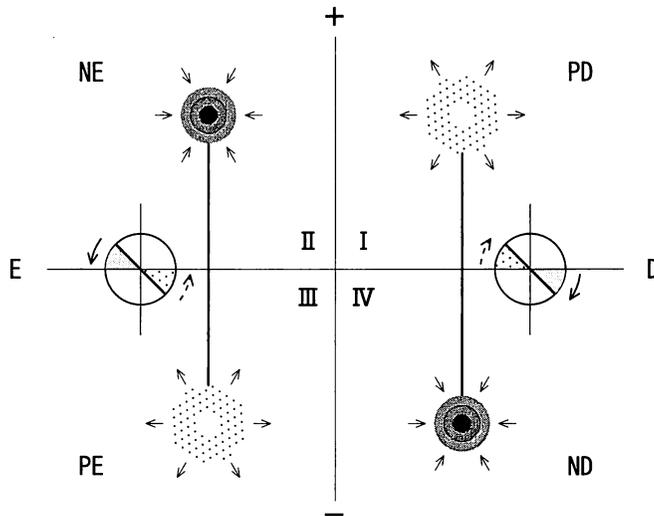
第III象限では $\langle 4 \text{ あわれむ} \times 8 \text{ ほしがる} \rangle$ のコミュニケーションによって、上向きに荷重差が縮小する。優位者から「同情」や「励まし」のようなポジションが送られて、劣位者Bの欠如がそれなりに補填される。つまりBにたいする不信や卑下が減少する（ $w < 0, dw/dt > 0$ ）。

3-1-4. シャドローの象限

以上PD、ND、NE、PEの各フェイズに特徴的なカップリングを概観した。各象限では

意識の指向対象（自己か他者か）と動作様式（上げるか下げるか）で特有の意識パターンが生成する、と考えられる。たとえば、PD や PE フェイズでポジオンの光りを見ようと欲する人は、ネクロンの暗闇の存在に目を瞑りやすい。あるいは ND の暗い闇に閉ざされた人の目は、ポジオンの光りを直視できないだろう。

ここで、象限 I と象限 IV、象限 II と象限 III はたがいにシャドーとなりうることに注意したい。象限 IV で負の「排除」に狂奔しながら (Negative Differentiation)、そのネクロン動作のシャドーとして象限 I で「誇り」や「栄光」といったポジオンの幻影を見たり、象限 II で余剰を「糾弾」しながら (Negative Equalization)、そのシャドーとして象限 III で欠如からの「救済」を夢に見る、といった論理的可能性がある。実際、糾弾 NE のシャドーとして救済 PE の幻想を貪るのが極左平等主義のテロリズムであり、民族浄化など排除 ND のシャドーとして栄光の幻覚を見るのが極右差別主義のテロリズムである。これらテロリズムの運動では、「ナクナレ！」というネクロンの欲動（破壊/タナトス）だけがオブジェクティブにリアルであり、「アレ！」という祈りは呪いと憎しみのシャドーとしてそのつどサブジェクティブに生きられるに過ぎない。粛清や人種差別のようなネクロ運動が「強迫性」をもち、しばしば歯止めを欠くのは、「希望」（ポジオン）が「呪い」（ネクロン）のシャドーと化してしまうからである、と考えられる（図 10）。



I PDはIVNDのシャドー III PEはII NEのシャドー

図 10 テロリズムとそのシャドー

3-2. イデオロギーの風

3-2-1. 変化の変化率

ソシオン空間上の各ベクトルの x 成分は、差異の速度の変化率、つまり加速度を表わしている。差異化のスピードが上がっていく（あるいは平等化の速度が減少する）ほど矢印は右に傾き、差異化のスピードが下がっていく（平等化の速度が増大する）ばあいは左に傾く。すなわち、右向きの矢印は右傾化の力を、左向きの矢印は左傾化の力を表わし、その矢印の左右成分の大きさ（長さ）が、差異を広げあるいは狭めようとする「力の強さ」に対応する。自他それぞれにたいして右向きあるいは左向きにはたらく4種類の力を考えることができる。ソシオン空間に展開したこの力を「流れ」あるいは（イデオロギーの）「風」とよぼう（図11）。この「風」の向きや強さを決めるのが「倫理」「道徳」、あるいは「イデオロギー」といった思想や思潮の「力」である。

3-2-2. 左向きの風

左向きの風はつぎの4種である。一見して、差異の存在を苦痛あるいは不当なものとして攻撃あるいは回避する平等主義的な感情の運動であることが理解できよう。

L1: 1 SPD → 2 SNE (ほこるな、つつしめ!)

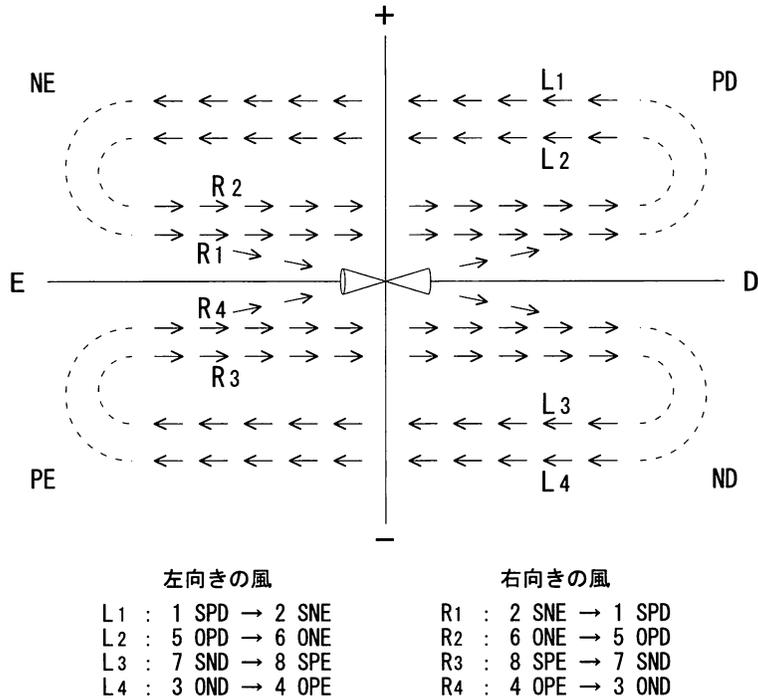
L2: 5 OPD → 6 ONE (たたえるな、ねため!)

L3: 7 SND → 8 SPE (ひげするな、ほしがれ!)

L4: 3 OND → 4 OPE (さげすむな、あわれめ!)

これら4つの「流れ」（ダイオンにはたらく力）は、ソシオン間の過剰な差異を解消することによってネットワークの同一性を確保するための「種」の狡知である、と考えられる。あたたかい「ヒューマニズム」と平等主義の「愛」（L1、L4）の影に、見えにくいかたちでネクロンの「欲望」と「呪い」が蠢いている（L2、L3）ことに注意したい⁴¹⁾。

41) 平等主義は、自他の差異の存在を諸悪の根源と見る思想であると同時に、差異が存在しない平等な状態を、すべての人が幸福になる理想の社会状態として希求する意識でもある。平等原理主義者は、よろこばしい至福の共同が実現しないのは、なお差異が不当にひそかに温存されているからである、と考えやすい。絶対平等の極北(左?)に理想社会の実現をめざしていたやさしいヒューマニストが、容赦ない糾弾の鬼へと変身するのはそのときである。あわれみとつつしみによるポジティブな平等主義の運動のすぐあとに、欲望と妬みに駆動されたネクロンの波がつづく(伊谷純一郎1986)。平等主義の第2波は、しばしば第1波の理想主義をのみ込んで、暴力と粛清の恐怖政治を打ちたてる。それは、愛よりも憎しみの方が強いという理由だけでない。平等主義の愛のエネルギーそのものが憎悪に転化して粛清の暴力を後押しするからでもある。差異の消滅する平等のユートピアを希求するエロスの欲動は、差異を分泌しつづける現実の人間と社会に対する呪い(死と破壊の欲動)へと転化しやすい。



中心の円筒はコミュニタスのトンネル

図 11 イデオロギーの風

3-2-3. 右向きの風

反対の右向きの風も起こりうる。いっしょであることよりも、卓越や個性の伸張をもとめる自由主義的な感情や理念の運動がそれである。

- R1 : 2 SNE → 1 SPD (つつしむな、ほこれ！)
- R2 : 6 ONE → 5 OND (ねたむな、たたえよ！)
- R3 : 8 SPE → 7 SND (ほしがるな、ひげせよ！)
- R4 : 4 OPE → 3 OND (あわれむな、さげすめ！)

これら4つの力には、自由主義の不可欠の要素がふくまれるが、やはり「希望」の要素

(R1、R2)と「呪い」の要素(R3、R4)が光りと影の対となって混在している⁴²⁾。それらの「風」は、個々のソシオンを鼓舞すると同時に、ネクローポジオ両面からネットワークに選択性をもたらし、「多様性」と「情報量」をうみだす重大な機能を果たしている、と考えられる。

3-2-4. 原点のコミュニタス

ユートピアを夢見る平等主義が「差異の解消」を「自他の融合」と錯覚するのは、それほどにつよく差異に同一化しているからにすぎない。これに対し大笑いとユーモアの精神が生み出す「豊かな無」は、物象化された差異の秩序を熱い自由エネルギーへと溶解して「コミュニタス」(V. ターナー 1968)の「トンネル」(図11)へと押し流し、すべてのヒトを世界の原点へと還元する。笑いは、死に先駆けることで生の原点へと回帰し、「躍動する無」⁴³⁾のなかであたらしい生成への希望と力を回復する隠された知恵である。

「同化」と「分化」という2つの力は(図9cの「むすんでひらいて」の流れに見るように)、ソシオンのネットワークつまりヒト社会が、「多様性(情報)」を内部に生成し、同時に(あるいはちょっと遅れて)「同一性」を確保しつつ、超個体的な生命システムとして「自己」を編み上げていく種の生存の基本戦略と対応しているのかもしれない。わたしたち個々人の愛と欲望、弾劾や犠牲の運動は、このヒト社会の適応戦略に駆動されたネットワークの運動を担う欲動のひとコマであり、(かけがえのない、しかし、しばしば盲目的)網目であるように思われる。社会学はその「超個体」としての「自己」の動きを見よう、見とどけようとする科学である。(つづく)

42) 平等主義の洗礼を受けた私たちは、自由主義的差別思想のなかにも、社会改良をめざす理想主義のモメントがあったことを忘れがちである。社会ダーウィニズムの影響を受けた優生学には、人類の進歩のために犯罪者の減少にまじめにとりくんだ形跡がある(D. フリーマン 1983)。歴史が目撃した人種差別と民族浄化は、このPD運動の末期に出現したND型シャドー・オペレーションであった可能性が高い。

それはちょうど、本来同胞愛にみちたPE型共産主義の末期(というよりごく初期をのぞいてすべての期間)に、不可能な平等を実現するためのシャドー・オペレーションとしてNE型の密告と糾弾と粛清が血の雨をふらせたのと同じである。劣悪な犯罪者や人種を絶滅すれば人類が高貴になるわけでもないこととちょうどおなじように、差別を根絶やしにすれば等しく幸せになるわけでもないことをヒトはフランス革命以降200年の年月をかけてやっと気づきはじめているのかもしれない。

43) 西田幾多郎の影響を受けた久松真一の用語である。久松(1981)は「無」を水、「有」をその波動と見る「東洋的無」の概念によって西洋的ニヒリズムを超えるヒューマンイズムの哲学を構想した。

参考文献

- アイブル=アイベスフェルト, I., 1967-78, 伊谷純一郎・美濃口坦訳, 『比較行動学』全2巻, みすず書房.
- 池田進, 1987・95, 『人の顔または表情の識別について』上・中 関西大学出版部.
- 井上芳保, 1988, 「ルサンチマンの社会学の構想——ニーチェの主題の継承をめざして」『思想』11, No. 773: 202-231.
- 伊谷純一郎, 1987, 「人間平等起源論」伊谷純一郎・田中二郎編著『自然社会の人類学』アカデミア出版会.
- ヴァレリー, P., 1980-82, 『ヴァレリー全集 カイエ篇』全9巻, 筑摩書房.
- 梅原猛, 1972, 『笑いの構造』角川書店.
- 大村英昭, 1989, 『非行の社会学』世界思想社.
- 岡原正幸・山田昌弘ほか, 1997, 『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代』世界思想社.
- 木村敏, 1978, 『自覚の精神病理——自分ということ』紀伊国屋書店.
- 木村洋二, 1983, 『笑いの社会学』世界思想社.
- , 1993, 「欲望のソシオン理論——ソシオンダイアッドにおける差異と欲望の力学と感情のキューブモデル」『関西大学社会学部紀要』25(2): 1-41.
- , 1995, 『視線と「私」——鏡像のネットワークとしての社会』弘文堂.
- , 1999, 「ソシオンの一般理論(Ⅰ)」『関西大学社会学部紀要』30(3): 65-126.
- , 2000, 「ソシオンの一般理論(Ⅱ)」『関西大学社会学部紀要』31(2)(3): 63-149.
- , 2001, 「ソシオンの一般理論(Ⅲ)——トリオンからソシオスへ」『関西大学社会学部紀要』32(2): 1-104.
- 木村洋二・池信敬子, 2002, 「ソシオンのネットワークと鏡像のコミュニケーション(1)——密告・盗聴のモードをふくむ会話のマトリックス」『関西大学社会学部紀要』32(1): 45-96.
- 木村洋二・渡邊太, 2001, 「親・子・カルトのトライアッド」『関西大学社会学部紀要』32(2): 105-175.
- 木村洋二・松尾繁樹・渡邊太, 2001, 「イジメのモードとネットワークの力学」『関西大学社会学部紀要』32(2): 176-204.
- グールドナー, A.W., 1970=1978, 岡田直之・田中義久ほか訳, 『社会学の再生を求めて』新曜社.
- 熊野建, 1982, 「ミシェル・ロサルド——知識と情熱」『現代のエスプリ・象徴人類学』誠信書房.
- サーリズ, M., 1972=1984, 山内昶訳, 『石器時代の経済学』法政大学出版局.
- 斉藤学, 1996, 『アダルト・チルドレンと家族——心のなかの子どもを癒す』学陽書房.
- 作田啓一, 1967, 『恥の文化再考』筑摩書房.
- シェーラー, M., 1919=1977, 林田新二訳, 「道徳の構造におけるルサンチマン」『シェーラー著作集4 価値の転倒(上)』白水社.
- ジンバルドー, P., 1977=1982, 木村駿訳, 『シャイネス第Ⅰ部内気な人々』勁草書房.
- スターン, A., 1949, Stern, A., *Philosophie du rire et des pleurs*, Paris.
- スペンサー, H., 1860=1984, 木村洋二訳, 「下降性の不一致と笑いの生成」『現代思想』12(2): 238-249, 青土社.
- ターナー, V., 1969=1976, 富倉光男訳, 『儀礼の過程』思索社.
- ダーウィン, C., 1859=1963-71, 八杉竜一訳, 『種の起源』全3巻, 岩波書店.
- 高橋由典, 1996, 『感情と行為——社会学的感情論の試み』新曜社.
- 多田富男, 1993, 『免疫の意味論』青土社.
- デーケン, A., 1986, 『叢書 死への準備教育(Death Education)』全3巻, メヂカルフレンド社.
- 徳岡秀雄, 1987, 『社会病理の分析視角——ラベリング論・再考』東京大学出版会.
- トマス, M., 1516=1957, 平井正穂訳, 『ユートピア』岩波書店.

- トラフィーロ, B.N., アボット, T., ライリー, J., 1992=1994, 上江洌達也・重本和泰ほか訳, 『非線形動力学とカオス——トポロジカルなアプローチ』星雲社.
- 永井隆, 1949=1976, 『長崎の鐘』中央出版社.
- ニーチェ, F., 1887=1983, 秋山英夫訳, 『道徳の系譜』『ニーチェ全集3』白水社.
- ハイダー, F., 1958=1978, 大橋正夫訳, 『対人関係の心理学』誠信書房.
- パーソンズ, T., 1951=1974, 佐藤勉訳, 『社会体系論』青木書店.
- バタイユ, G., 1967=1973, 生田耕作訳, 『呪われた部分』二見書房.
- ハッキング, I., 1995=1998, 北沢格訳, 『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』早川書房.
- バフチン, M., 1965=1974, 川端香男理訳, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房.
- 久松真一, 1981, 『無神論』法蔵館.
- 廣松渉, 1980, 『弁証法の論理』青土社.
- 福田純子, 1994, 『コズミックスマイル——笑顔は宇宙のエネルギー波動』たま出版.
- フリーマン, D., 1983=1995, 木村洋二訳, 『マーガレット・ミードとサモア』みすず書房.
- フロイト, S., 1905=1969, 高橋義孝訳, 『ユーモア』『フロイト著作集』第3巻, 人文書院.
- ベネディクト, R., 1946=1948, 長谷川松治訳, 『菊と刀——日本文化の型』社会思想社.
- ベルグソン, H., 1900=1965, 鈴木力衛・中沢紀雄訳, 『笑い——おかしさの意味についての試論』『ベルグソン全集』第3巻, 白水社.
- ホブズ, T. 1651=1966, 水田洋・田中浩訳, 『リヴァイアサン——国家論』世界の大思想13, 河出書房.
- ホマンズ, G.C., 1950=1959, 馬場明男・早川浩一訳, 『ヒューマン・グループ』誠信書房.
- ボールディング, K.E., 1962=1971, 内田忠夫・衛藤瀧吉訳, 『紛争の一般理論』ダイヤモンド社.
- マートン, R.K., 1949=1961, 森東吾ほか訳, 『社会理論と社会構造』みすず書房.
- マリノフスキー, B., 1922=1967, 寺田和夫・増田義郎訳, 『西太平洋の遠洋航海者』『世界の名著59』中央公論社.
- 村松増美, 1996, 『指導者たちのユーモア——同時通訳者のおきのお話』サイマル出版会.
- 森下伸也, 1996, 『ユーモアの社会学』世界思想社.
- 山口昌男, 1975, 『道化の民俗学』筑摩書房.
- ラカン, J., 1963=1972, 宮本忠雄訳, 『<わたし>の機能を形成するものとしての鏡像段階』『エクリ』I, 弘文堂.
- ルーマン, N., 1984=1995, 佐藤勉監訳, 『社会システム理論』上・下, 恒星社厚生閣.
- ローレンツ, K., 1949=1998, 日高敏隆訳, 『ソロモンの指輪——動物行動学入門』早川書房.
- (著者名につづく数字は、原著初出年と日本語訳出版年)

お詫びと訂正

前号「ソシオンの一般理論(III)」の図版中 p. 55 PNN-H 4-3, p. 69 NNP-H 4-3, p. 70 NNP-H 4-4, p. 73 NNP-Y 6-4, p. 76 NPN-J 2-1, p. 80 NPN-H 4-2 の BC 間の矢印の向きに誤りがありました。訂正してお詫びいたします。